

アイノテ世界樹日記

すたりむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界樹の迷宮のプレイ日記を基にした二次創作です。

詳しい情報は最初の「ごあいさつ」をご参照ください。（4月18日から公開します）

古い作品ですが、原作愛にだけは溢れている作品だと思います。よろしくお願いします。

目次

アイノテ世界樹日記―ごあいさつ	1
第一階層：デビュー、試行錯誤、そして勝利	4
第二階層：探索、栄光、そして挫折	12
第三階層（1）：休養、修練、そして死闘	22
第三階層（2）：探索、搜索、そして空振り	33
第四階層（1）：栄光、悲劇、そして敗北	39
第四階層（2）：試練、試練、そして試練	47
第四階層（3）：皆伝、決意、そして死闘	56
第五階層（1）：青と白	62
第五階層（2）：休養、深層、そして馬鹿	67
第五階層（3）：始末、復活、そして呪い	75
第六階層（1）：リハビリ、訓練、そして血戦	80
第六階層（2）：散るもかなり	86
エピソード：次の冒険へ	93
アイノテ世界樹日記：あとがき	99

アイノテ世界樹日記―ごあいさつ

まず、この作品の主旨について説明します。

この作品は、たぶん2007年から2008年ごろ……? にかけて、世界樹の迷宮のプレイをキャラクターの日記にして作品としたら面白いんじゃないかなー、と思って書いたものです。その後、世界樹4まで似たようなものを作っています。

アイノテというのは主人公のソードマンの名前です。

この時期、僕の中ではプチ縛りプレイが流行しており、そのためこの作品の基になったプレイでも、いくつかの制限を設けております。このときの縛りは

「雷鳴と共に現れる者戦を除いてメディックの参戦不可」

「30レベルになって引退⇒再構築するまでアルケミストの術禁止」

「第五階層までサジタリウスの矢禁止」

この程度でしたかね。

まあ、世界樹自体、三周目くらいのプレイでして、いまから考えると鼻で笑ってしまうような低レベルな縛りですが、大目に見えていただけると幸いです。

(ちなみに世界樹初代だと、単騎プレイでは第二階層でケルヌノスにどうにもならなくなって詰んだ記憶があるんですが、あれ工夫次第ではどうにかなるんですかね。二人パーティなら、レン&ツスクルをソードマン&バードで打倒するところまではやった記憶があります)

以下、作品の内容についての注記。

第一に、「プレイ内容に即した日記にする」というのが徹底されております。なので、「今日はいきなり魔物にのされて即撤退」とだけ書いてあっても物語が進まない日がありますが、それは「迷宮行ったらいきなり全滅しかけて即撤退宿屋した」というプレイ内容とリンクしているとお考えください。

第二に、「三周目のプレイなのを反映している」ということがあります。結果として、一周目と二周目のパーティがサブキャラクターとして出てきます。一応、わかりにくくないように書いたつもりですが

……キャラクターが多いような気がします。ご容赦ください。
以上です。

古い作品ですが、久々に読み返してみたところ、文章は荒いし読みやすくもないけれども、世界樹の迷宮への愛にだけは溢れた作品だったので、多少読みやすく改稿した上で、投稿することにしました。よろしければお楽しみいただけると幸いです。

おまけ：主人公達パーティの名前とクラス

1) アイノテ

クラス：ソードマン アラインメント：Law—Neutral

性別：男 年齢：18

使用武器：剣 初期戦闘スタイル：唯一のまともな火力

備考：自己評価が低くひねくれているが誠実

2) ショロロ

クラス：アルケミスト アラインメント：Chaos—Good

性別：女 年齢：13

使用武器：杖 初期戦闘スタイル：アイテム係

備考：無駄に楽天家で意外と情に厚い

3) カチドキ

クラス：ジャーナリスト アラインメント：Chaos—Neutral

性別：女 年齢：19

使用武器：弓 初期戦闘スタイル：一応補助はする

備考：バードなのにジャーナリストとか言い張る無駄なこだわり持ち

4) イナー

クラス：レンジャー アラインメント：Neutral—Neutral

性別：女 年齢：21

使用武器：弓 初期戦闘スタイル：お荷物

備考：外見だけは歴戦の勇者のように見えるが実際にはひたすら臆

病

5) コルネオリ

クラス：パラディン アラインメント：Law | Good 性別：
男 年齢：16

使用武器：盾 初期戦闘スタイル：ゴリ押し

備考：突撃嗜好でわりと無茶をする

第一階層：デビュー、試行錯誤、そして勝利

・笛鼠の月、11日

故郷の田舎村から旅をして5日目。ようやくエトリアに到着した。今日からこの俺、アイノテもとうとう冒険者。輝かしい冒険への道が待っている。まずはどこかでギルドに入ろうと思ったのだが、目につく募集はみんなメディック。あ、これはレンジャー。これはアルケミスト……俺はソードマンだっつーの！

途方に暮れていたところ、金鹿の酒場の女主人がいいことを聞かせてくれた。どうも、最近話題のロックエッジというエースギルドの人員が膨れあがり過ぎたため、人員整理として株分けしたものの、こっちは人数が少なすぎて困っているらしい。ブラボー！ 速攻で紹介してもらった。

どうやら新ギルドの名前はホイスビーというらしい。現在集まっているメンバーはパラディン、アルケミスト、レンジャー、バード。なんてこつたい、見事に前衛攻撃職が抜けてやがる。よし、ここは一丁俺の腕を見せてやろうじゃねーか！

・笛鼠の月、12日

即、後悔した。

ぶつちやけ、どんなギルドだって使える奴を放出するわけねーよな……リストラ組の悲哀が漂ってやがる。まともなのは俺だけじゃねえか。

頭を整理。とりあえずギルドのメンバーを見回してみよう。

パラディン、コルネオリ。こいつはそこまで悪くねえ。血の気が多くてテメエホントにパラディンかと言いたくなるが、気骨はあるしやる気にも溢れてる。現時点ではほんこつだけど、鍛えればどうとでもなるだろう。

アルケミスト、シヨロロ。ガキのくせに小生意気な理屈を振りかざす、いけすかねえ奴だ。特に初級の冒険者にとつてはでかい敵には毒つてのがセオリーなんだが、こいつは毒なんて見栄えがしないし邪

道だとか言って覚えやしねえ。じゃあなに覚えてるんだって、あん？
TPが高い？ 樹海の知識が豊富？ テメエちよつとその履歴書のスキル表欄見せてみる……ってオイ！ マジで術マスターなんも持ってねえじゃねえか！ 泣かすぞガキ！

レンジャー、イナー。モグラ3匹が出て来ただけでいきなり泣き出した時にはマジでどうしようかと思った。腕は悪くねえんだがな……弓による支援は期待できねえってことか。金になる薬草とかを見分ける知識だけはガチですげえ。けどいま欲しいのはそれじゃねえ。

バード、カチドキ。ジャーナリスト気取りの大馬鹿野郎で、ろくに歌も歌えねえくせに馴れ馴れしい。ていうか使えねえ。一応弓は撃てるみたいなんだが俺がバードに期待してるのはそっちじゃねえ。以上。つうか早速樹海で戦闘したが、コルネオリ以外戦力にならねえじゃねえか。くそ。

・ 笛鼠の月、13日

これと違って戦果もなくボロボロになって撤退。

まあ、泣き虫なのを除けばイナーの姉御は悪くねえ。問題は残りだ。

・ 笛鼠の月、14日

剣が刃こぼれするほど堅い虫と遭遇。おいアルケミスト、炎……そうだった。撃てねえんだよなあ。こんちくしょうめ。

死にそうになりながらなんとか撤退。これだからガキは。

・ 笛鼠の月、15日

1階で休憩中に変な色の蝶と遭遇、なんとか撃退。

こえーな。ちよつと油断していると樹海はすぐこれだ。アレに勝てたのはまぐれと思うが、全員無事でよかった。次からはああいう場所ですまないようにしましょう。

で、同じく1階で、見分けにくい獣道発見。いろいろ見つかる伐採

所との連絡通路が出来たので、これで当面の資金繰りはなんとかかなりそうだ。

・ 笛鼠の月、16日

安定収入を得て気が大きくなったせいかな、コルネオリの勧めで2階へ。

即、ウサギ共が大挙して襲撃。のされちまった。ガツテム。

どうも俺がのびてる間、カチドキの野郎が踏ん張って倒したらしい。帰ってこれたのはシリカ商店で売っていた不思議な糸のおかげだとしても、よくがんばってくれたもんだ。少しだけ、あいつについては見直してやらんでもない。でも歌を歌え。それが先だ。

・ 笛鼠の月、17日

なんだよあのデカブツ……

びびっちゃまった。後で情報収集をしたところ、狂える角鹿、とか呼ばれているらしい。2階の主みたいな奴で、ぶっちゃけ勝てる気がしねえ。

が、コルネオリに言わせると、前のギルドのマスターであるメディック、アシタの棍棒にかかれば、あの程度の獣なんかは一撃らしい。すげえな。つうかそれホントにメディックなのか？

・ 笛鼠の月、18日

3階に到達。

そして俺は、自分がいかに甘かったのか思い知った。

本当にマジで、カマキリ超こええ。勘弁してくれ。コルネオリ、アシタさん自慢はいいからさっさと逃げろ。つうか逃げコース間違っ てんじやねええええ！ なんとか逃げたところにダンゴムシみたいなケダモノに襲われて全滅。しかけたところを、通りすがりの強いブシドーとカースメイカーに助けて頂いた。シヨロロ曰く、ボクがレンさん呼んできたからみんな助かったんだからね、とのこと。おまえそういうことを胸張って自慢するくらいなら、その前に術を身につけ

困った。メデイカを確保したら、もう宿に泊まる金額がねえ。仕方ないので、宿泊まつて起きて伐採行って帰ってシリカ商店で売り払ってメデイカ確保してから出発。くそ、本気で追いつめられてるな。なんだこの自転車操業。

……いやまあ、正直1階で木こりのまねごとだけしてりや十分儲けは出るわけで、無理して下に潜る理由はあんまりないんだが。そう言ったらシヨロロが見下したように笑ったのですねえムカついた。くそ、意地でももつと儲かる場所に行つて、豪邸立ててやる。ナメるなよ！

・ 笛鼠の月、23日

樹海で500エン発見。た、助かった……と思つた直後、鹿に襲われそうになって泣きながら逃げた。不思議な糸に超感謝。そして100エンの出費。ガツテム。

で、諦めきれずに再出発し、3階で狼と初遭遇。つっても戦つたのは俺たちじゃなくて、いつぞやのカースメイカーのお嬢ちゃんだった。ツスクルとか言うらしい。それにしても呪言一撃で相手を殺すつてのはとんでもねえな。ツスクル曰く

「……ペイントレード。簡単」

とのことだけど、アレたぶん食らつたらうちのパーティー全滅してる。

・ 笛鼠の月、24日

狼を初撃退。つ、つええ……

あとちよつと遅れてたら、血の臭いを嗅ぎつけた他の狼が到着してえらいことになってた。つくづく攻撃力不足が悔やまれる……なあ、シヨロロさんよ、テメエに言つてるんだぜ？

今日、金鹿の酒場で火の術式使える奴を呼んでこいつて依頼があった。いま金欠なんでなんとかこなそうとしたものの、シヨロロじゃどうしようもないんで無理言つて友人のコツクを紹介して報酬を分け合うことに。つうか友人はただのコツクなんだが火の術式1レベル。

シヨロロ、テメエより使えるぞこいつ。

・ 笛鼠の月、25日

狼、追加して5つ撃退。コツをつかんできた。

で、浮かれて調子に乗ったシヨロロが、執政院からまーた勝手に5階の地図を借りてきやがった。しかも狼どものボス、スノードリフトをこらしめてこいという執政院からのミッションまで受けてきちまった。

……えーと、切れていいですか。テメエ俺たちがそんなことできるレベルか！ と言ったら、シヨロロの奴、計算上は近いうちに倒せるようになるから大丈夫、と得意げに返しやがった。おまえが戦うんじゃないんだぞコラ！

・ 笛鼠の月、26日

狼、目につく限り全撃破。これでひとまず4階は安全か、と気を緩めて5階へ足を伸ばし、暴れ野牛にのされて気絶。な、情けねえ……ぶつちやけ、以前はのびたコルネオリをひきずって帰ることが多かったのだが、ここ最近では立場が逆になってやがる。さすがパラディン、堅いな。

で、この状況で狼のボスをどうやって倒せと。無茶言うな。まずは頻繁に道を突進してくる野牛をどうにかしねえと話にならねえぞこれ。

・ 笛鼠の月、27日

迷宮で誰かの落とし物か、見慣れない剣を見つける。シヨロロの鑑定の結果、ボアスピアソード？ とか呼ばれているタイプの剣だとか。使ってみたが、確かに悪くない。けど野牛退治にはちと力不足だ。どうしたもんかな……

・ 笛鼠の月、28日

目についた鹿をのしてみたらえらくでかい牙が丸ごと手に入った。

シヨロロ曰く

「あ、これたぶん弓の素材になるよ」

とのことだったのでシリカ商店に行くと、すつつつげえ感激された。最近はレアものだったらしい。お礼に安価で獣の大弓とかいうごつつい弓を2つ分、仕立ててくれた。すげえありがたい。これのおかげで野牛を攻撃前に打ち倒すことができるようになったはず。よし、スノードリフトに手が届くぞ！

・天牛の月、1日

油断して野牛にのされました。不覚。

・天牛の月、2日

昨日の油断を悔い、今度はもうやられないように覚悟して出陣。スノードリフトまでたどり着いたが、慎重に行くべきだとカチドキが主張していったん撤退。悔しいが奴の言うとおりで。あの圧力の敵に、いま敵うとはどうてい思えない……

で、帰って戦利品を売り払ったところで、シリカ商店で売り出し中の格安新商品に気がついた。……ボアスピアソード？ マジで？

コルネオリが購入。飛躍的に攻撃力が伸びた。これなら……行ける、か？

・天牛の月、3日

大決戦を制した理由は、地の利を得たことだった。

迷宮の狭い箇所におびき寄せ、防御中のコルネオリが攻撃を一身に受けて耐久。耐えて耐えて耐えてる間にシヨロロが抜け目なく俺に近寄り

「はいアイノテ、ファイアオイルだよ」

テメエ今日は気が利くじゃねえか。気合いのダブルアタック！ということでの勝利。近くのスノーウルフどもをまったく寄せ付けず、傷ついたのはコルネオリの盾だけだった。

で、いいかげん5階まで降りるのも長いし、シヨートカットが欲し

いなーと思っていたら、たまたま出会ったレンが樹海磁軸とかいう便利なモンを紹介してくれた。いきなり6階までワープできる優れものだ。ある程度力がある者にしか使用を許されていないそうだが、スノードリフトを討伐できるおまえらならば問題ないだろうと。よっしゃ、これでさらに儲かる場所を探せるぞ！

第二階層：探索、栄光、そして挫折

・天牛の月、4日

6階から先、一層深くなった森林は、通称第二階層と呼ばれているらしい。

今日からそこを探索だ気張るぞーと言って宿を出たところ、広場で変なガキ発見。コルネオリの知り合いらしい、カチノへとかいう陰気なカースメーカーの小僧は、俺たちを見るなりこう言った。

「今日……6階行くと、死ぬよ？」

こ、こええ。足がブルっちまった。それでも新階層に行きたいと駄々こねるシヨロ口をむりやり引きずって1階へ。こちらも、酒場の噂によれば、最近新しい通り道が見つかったらしい。探索する余地はあるだろう。

で、行ってみたら超強い獣が暴れてやがる。それでもがんばって探索しようとしたのだが、途中で挫折。ぶっちゃけ、こいつら第二階層の敵じゃねえのか。なんでこんなところに……新人がうっかり入り込んだら、死ぬぞ？

・天牛の月、5日

1階の新通路の探索、終了。らしい。

らしい、というのは、最後俺は野良ナマケモノにのされて意識がなかったからだ。どうやら泣きながらカチドキが俺たちの身体引きずって逃げ出したらしい。……案外力あるよなあいつ。なんでバードなんかやってんだ。いや、ジャーナリストだっけ？

・天牛の月、6日

6階、初探索。

獣、ものすごく強いなー。どうしようもなく逃げ回りながら、それでもなんとか、いろんな金になる素材などを見つけていることができた。でもナマケモノ怖いよナマケモノ。助けてー。

・天牛の月、7日

今日は朝からコルネオリがおおはしやぎ。なんでも、新しい必殺技をひらめいたから実戦で使ってみよう！とか。どんな技だよと聞いたら、シールドスマイトと言って盾を正面に構えて突撃して盾でぶん殴る……それ、技なのか？と聞きたかったが、あまりにコルネオリが嬉しそうなので言うに言えなかった。

で、とりあえずナマケモノ相手にぶちかましてみたところ、衝撃に巨体がぐらりと傾いた。おお、すげえ！と思った次の瞬間ナマケモノから強烈な一撃。コルネオリ気絶。……ダメじゃん。要は地力がないとなにやったらって一緒ですよという、大変ためにならない教訓でした。

・天牛の月、8日

伝説のギルド、グレイロツジのメンバーが、後進のためと称して稽古会を開いた。

意気揚々と行くコルネオリに連れられて、俺も嫌々ながらも参加。といっても、俺は楽しく冒険して樹海で稼げればそれでいいので、稽古とか興味がないのです。なのでロッドテイルとかいう重戦車みたいな戦士にコルネオリがタコにされてる間、俺はマハという名前の、発音の少しおかしな子とずっと喋っていた。

どうやら彼女、ずいぶん遠くの国から来たらしいのだが、意外なことにイナー姉さんをよく知っていた。以前は二人でよく、魔物に見つからずにそーっと移動する方法とか研究していたらしい。自分もレンジャーになりたかったけど、トロかったので無理だったんだーと、楽しそうに彼女は言った。

と、そんな感じで雑談しているところにロッドテイルから怒号。喋ってる暇があつたら貴様らも戦えと言われ、仕方なくマハと一緒に模擬剣を構える。可愛い子だから傷つけないなーと思いつつ手加減気味に仕掛けたら片手の指で止められ、あ、ヤバ、と思って身を引いたところにあごを盾でかるーく撫でられた。そこから先の記憶がない。

あのレベルの戦士とタメ口利いてたのか俺は……迂闊だった。人は外見によらない。教訓としてもらっておこう。

・天牛の月、9日

扉を開けたら熊が3匹もいたときの驚きといたら。

ていうか、なんなんだよあの熊ども。マジで尋常じゃない。スノードリフトなんて目じゃねえだろ、あれ。第二階層半端ねえな……とか言いつつ、最近シリカ商店に並んだ新型メデイカを惜しみなく使えば一応探索をできるようになってきたうちのパーティは、案外適応力が高いのかもしれない。

ま、しばらくは採集して金稼ぎつつ、メデイカ連打の日々だな。

・天牛の月、10日

7階に到達。案外早かったな。

……まあ、到達した早々、いばらの敷き詰められた地面にびびって撤退したんだけど。

帰り道、シヨロロがきよろきよろ茂みを見ているのでなんだと思ったら、

「ほらアイノテ、ここに獣道があるよ」

マジかよ。通つたら入り口近くの茂みに出た。つうか執政院の地図に載ってねえぞこれ。なにやってんだあいつら。

・天牛の月、11日

サソリに袋小路に追いつめられて撤退。

マジで泣きそう。なんだあのバケモノの山。第一階層に帰りたい。

とか思っていたら、なんか変な水晶のカケラをシヨロロが拾っていた。奴が言うには、浅い階層にあつた封印された扉の鍵らしい。暇があつたら回ってみようよ、だと。まあ、暇があればな。

そして7階の探索はほぼ完了。そろそろ資金繰りが厳しくなってきたが、執政院が欲しがっている飛竜の卵とやらは8階にあるって噂だ。アレ取ってくればしばらくはしのげるよっ、とはしゃぐシヨロロ

を見ていると……やばい、不安しか出てこない。なにかの刷り込みか？

・天牛の月、12日

8階には飲むと体力を回復できる不思議な泉があると聞いたんだが、行ってみたら枯れていた。

その場にいたレンの言によると、こういうことはよくあるそう。上の階に魔物とかが住み着いて、巣を作った結果として水がストップしてしまおうとこうなるらしい。回復したいなら自分で魔物を倒してこい、だつてさ。うがー。

仕方ないので飛竜の卵へゴー。飛竜、でかすぎて姿見ただけで心臓発作で死ぬかと思つたが、がんばつて逃げ回つた結果、なんとか卵を手に入れ即逃げ。執政院に報告した。しかしそれはいいとして、8階には下層へ進む階段が見当たらない。どうしてだろう？　と思つて、ちやうど酒場にいたマハに質問してみた。

「あれ、飛竜の巣の奥に隠し通路あるんだけど、知らないの？」

……マジすか。つか俺たち、あんなおつかないところに何度も足を運ばなきゃあかんのですか。勘弁してくれ。

・天牛の月、13日

いい加減、ちよつと自分らは弛み過ぎなんじゃないかと思ひ、嫌がる奴らをむりやり連れて熊に特攻。

……俺だけ気絶つてどういうことつすか。

いや、まあ、コルネオリの奴の防御が堅いつてのは知つてたが。ここまでとは。

このあたりで金が尽きたので採集活動再開。即座に3000エノンほど稼いでふたたび探索へ。こういうとき、イナー姉さんの採集スキルはマジで頼りになる。

・天牛の月、14日

7階で巣を作つて泉を堰き止めていた魔物を撃破。

固定したねぐらがあるわけだし覚悟して行つたが、それにしてもえらく強かった。仕方なく虎の子のファイアオイルを使つちまつた……アルケミストが（ry

最近アイツ開き直つてねえか。むかつく。

・天牛の月、15日

熊、2体目を撃破。らしい。

らしいというのは、また俺だけのびてたから。つうか、一撃で倒れるんすけど。どうしろと。

コルネオリがガードしてくれりゃいいんだが、あいつの盾突撃以外にろくな攻撃手段がない現状ではそれも無理だし……困つた。打つ手がない。

・天牛の月、16日

ここ数日第二階層をうろついて、俺たちの致命的な欠陥が浮かび上がってきた。要するに、危険な花びらによる眠り攻撃をかわす手段がないんだな。

盾突撃じゃどうしても後攻になつちまうし、それ以外だと攻撃が来るまでに2匹しか倒せないの、たくさん出てきたときにはもうどうしようもない。全員眠つたところに火食い鳥の火炎弾とか来た日には、これはもう火葬ですわ。いや、かろうじて生きてたんだけど、あのときは「詰み」という言葉を本気で意識したな……

くそ。どうすつかな。

・天牛の月、17日

なんかスノードリフトと愉快的仲間たちが復活したらしい。

執政院はそれで朝から大忙し。俺たちも当然のごとく狩り出されたんだが、結果から言えば俺たち出る必要あつたのか？ みたいな感じだった。

というのは、コルネオリの古巣のロックエッジが討伐隊に参戦したからだ。つうかあのアシタとかいうメディック、マジで棍棒死ね死ね

ラツシユだけでスノードリフト狩りやがった。最後、スノードリフトがガチ泣きしてた気がするのを見間違いか。コルネオリは憧れのアシタさん大活躍に目を輝かせてたが、俺はぼかーんと馬鹿みたいに口を開けて突っ立ってることしかできなかつた。

・天牛の月、18日

樹海サソリの持つ、真鉄のけっこう分厚い殻があるんだが、これをシリカ商店に持っていったところ大好評。最近真鉄がちょうど尽きていたらしい。

もう少し持ってくれば真鉄製のブレストプレートを作つてやるのことだが、それより俺としては新型の剣、レイテルパラツシユが店に並ぶようになってきたのが嬉しい。これで俺の攻撃の威力もそれなりに増えるつてもんだ。すげえ助かる。

コルネオリも防御陣形覚えたつつってたことだし、これでようやく樹海のさらなる奥地への探索が可能になるつてわけだ。

……金があればな。くそ、金欠が激しいぜ。

・天牛の月、19日

嘘みたいに戦いがうまくいくようになった。

やつぱり、防御陣形+レイテルパラツシユ二本が画期的だったらしい。すげえつええ！　と思つて調子に乗つて熊に突撃して俺だけ撃砕。な、なんで……

防御力不足、深刻です。

それはともかく、以前からギルドのアドバイザーとして登録所に居座つてる眼帯ヤローがへんな提案をしてきた。8階で5日間の武者修行？　無茶言うなよ……と思つたが、餌として出されたシリカ商店で発売されはじめたばかりのニューモデルの服にシヨロ口が過剰に反応。カチドキを口説き落としたせいで、決行することになつちまつた。ガツテム。

つうかその話をマハにしたら、けらけら笑いながら

「でもさ、回復の泉の近くじゃほとんどの生き物はおとなくなるか

ら、その辺で5日キャンプすれば楽勝だよ?」

とか言われた。いやまあ善意で言ってくれたところ悪いが、その辺を見抜けてのがこの試練の主眼だったんじゃないや……いいけどよ。感謝もしてるけど。

つーことで、今は夜。これから逝っていきます。

・天牛の月、25日

生きて帰ってきたぞー!

いやまあ楽勝だったけど。最近俺が使うようになった新技、トルネードがマジで強いということに気がついたら、急に楽になった。それでも最初は殊勝にもいろいろ鍛えながら回っていたのだが、収集品が持つて帰れないくらい膨れあがったので慌てて中断。あとは飯を狩るとき以外、ずっと泉のそばにいた。

いちばんはしゃいでいたのは例によってシヨロロで、林間学校みただいとか言つて大喜びしてた。で、放っておいたらいきなり黙り込んだのでその辺の木を指差してシヨンベンならそこらへんでしろと言つたらすげえ怒られた。そういやあいつ、女だったんだな……やせっぽちで、背が高くて、男口調で、ガキだからつい忘れちゃう。つか名前もあんまりこのあたりの地方の女らしくはないよな。と聞いてみたら、なんと父親と同じ名前らしい。マジかよ。アルケミストどもはクレイジーだな、とカチドキに言つたら

「ん、でも大シヨロロはわりと良識人だよ?」

と返された。なんでも前に取材に行つたら、すごく丁寧に扱つてもらつたらしい。……それだけで良識人という判断もどうかと思うが。というかこいつ本当にジャーナリスト活動とかしてたのか。

そしてキャンプ。うちのパーティはひ弱なのでここまで長く籠もつたことはなかったが、やっぱりキャンプともなるといろいろわかるものである。特に、イナ―女史の料理が絶品ということが判明。思ふんだけど、このひとは冒険者にしとくのがもつたいたくないか。当番制だったので他の奴の飯も食つたが、コルネオリのは食べたもんじゃなかった。後はフツ―。意外にもシヨロロが食えるモンを作つ

てきたことには驚いたが、俺とどっこい程度じゃまだまだだね。

しかしやつぱり、5日も潜ると普段見ないものが見えるねー。樹海で生きるコツが多少見えたような気がする。

そして帰ってきたらシリカ商店で新発売が目白押し。カチドキは新しいリユートに見入っていたみたいだが……悪い、とりあえずロングボウとヒーターシールド優先な。

・天牛の月、26日

調子に乗って7階の大サソリを倒してみた。案外イケるもんだな……が、さすがにこんなのを繰り返していると普通に金が尽きる。仕方ないので明日は採集生活だな。

・天牛の月、27日

すげえ。今のイナー姉さんが本気を出すと1日で4000エンも儲かるのな。

あまりに儲けたので、カチドキに新しいリユートを大盤振る舞い。すげえ喜んでた。こいつもジャーナリストとか名乗ってるが根っこ部分でバードなんだよな……

そして9階を漁る。だいぶ耐久力ついてきたな、うちも。

・天牛の月、28日

うっかり飛竜とコンタクト。やったね♪

いやマジでシヤレになってねえっての。ありや人間に勝てるもんじゃねえわ。一応、コルネオリが一撃で意識トバされつつ身体で食いついて時間を稼いでくれたおかげで、たまたま近くにいたロックエツジの救援が間に合ったけど。

しかしロックエツジ、ホントとんでもねえな。ダークハンターのハラヘルスって姉ちゃんからはイナー姉さんと同じ気配を感じたが、あの腕は本物だわ。以前会ったカチノへと一緒にびしびしと縛って相手の動きを封じ、その間に棍棒と矢と斧が雨のように降り注ぐ。あつさり狩つちまった。信じられねえ。あいつら人間か？

そして10階突入。すげえ、俺たちまるで一流の冒険者みてえ！とひやつほうしつ突撃し、ドアを開けたらゾウが4体もいて死ぬかと思った。マジ勘弁。

・王虎の月、1日

密林の中、レンと会った。

こいつもすげえよな。どこのギルドにも入ってないみたいなのに、腕だけで樹海の中をひとりかふたりでうろうろしてやがる。

で、レンが言うには、この先は行くべきではないらしい。なんでも、以前からこの辺ではケルヌノスとかいうヤバい獣が大暴れしているの、行くと君たちのレベルじゃ間違いなく死ぬぞ、ということ。上等だ、行つてやろーじゃん！ と言えるほど俺も無謀じゃありません。シヨロロとかやる気満々だったけど。まさか勝てる気か？

・王虎の月、2日

今日起こったことを冷静に書き留めるのは、ちと難しい。とりあえず書かなきゃいけないことは山ほどあるんだが……

時系列順に行こう。まず、いつものようにシヨロロが無茶なことを言い出した。これはまあいい。奴はそういう性格だったのはもう重々知っている。だがそれを誰一人止めなかったのは、たぶんここ最近の冒険の成功で浮かれていて、天狗になってたんだろう。

結果、俺たちは密林の王者、ケルヌノスと戦うことになった。

勝てたさ。ああ、勝てた。俺の右腕と引き替えにな。

全治2週間。思ったよりは浅かったらしい。怪我したのは俺だけじゃねえ。無茶やったシヨロロのほうも、同じくらい寝込まないとダメだそう。

せっかくギルドの経営も軌道に乗ってきたトコだったのになー……めげるわ。とりあえずコルネオリ達は浅い階層を回って当座の資金を稼ぐことに決めたらしい。あーあ、ひでえもんだ。

シヨロロは、これまでにない大失敗のせいで部屋に籠もって出て来ねえ。ま、若いうちはそんなこともあるさ。せいぜい悩め。ついでに

これを機にもうちつと使えるようにならねーかな。
……ま、なんだ。俺の腕が上がるようになるまでには、な。

第三階層（1）：休養、修練、そして死闘

・王虎の月、4日

起きたら一日が経過していた。

どうも一昨日、日記を書いたから1日以上起きなかつたらしい。ずいぶん疲れが貯まってたんだなあ。

コルネオリ達は11階の探索をしつつ、臨時で誰かを雇うそうだがもう募集はしているそうなので、後は来るのを待つだけらしいんだが……うちの知名度で、まともなのが集まるかあ？　ちよつと不安だ。

・王虎の月、5日

速攻で2人集まった。早。

しかし、こいつら使い物になるのか？　経歴だけは立派なんだけどなー。

ダークハンター、ナリアンテスは黎明期のグレイロツジに参加していた古強者。だそうだが、普通に古いだけじゃねえのかこいつ。動き見てもなんかあんまりキレがねえし、聞けば一時期引退してたそうなんだが、まだ戦えるのか？　不安だ。

ブシドー、ネイホウはレンの紹介でロツクエツジに入ったという……その、経歴だけ見れば超強そうなんだが。ぶっちゃけ、しゃべり方がひどい。「いやーソレガシ案外強いでござるよニンニン」という初対面の挨拶を見て不安にならないほうがおかしいだろう。まず案外とか自分で言うなよ。そもそもロツクエツジの二軍っていう立場は出会ったばかりのコルネオリと同じなんだが、コルネオリと違ってこいつには気合いが足りてないように見える。レンに会えたら彼女の評価を聞いてみたいもんだが……ああ、不安だ。

・王虎の月、6日

見舞いにくれてくれたマハ相手に雑談。

ナリアンテスについては、その身分は正しいと保証された。引退してからどうなったかはマハにもわからないが、少なくとも全盛期は、

あのロッドテイルも認める優秀な鞭使いだったらいい。ちなみに引退した頃の腕は

「うーん……そのころあたしたちも第三階層だったから、いまのアイノテたちよりちよつと上くらいだったと思うよ」

だそうな。

それにしても気が滅入る。俺の腕は相変わらずさっぱり上がらない。大丈夫なのかこれ。

・王虎の月、7日

ケルヌノスに頭を刈り取られる夢で目が覚めた。ここんところ、こういうのばっかだ。寝覚め悪いったらありやしねえ。

それはともかく。実力を心配していたナリアンテス&ネイホウだが、どうやら杞憂だったらしい。奴ら金持ちだから装備はいいとはいえ、たった二人でスノードリフト狩ってきやがった。すげえな……ぼやぼやしていると、俺もクビになっちまうな。

・王虎の月、8日

新パーティの探索、初日。

カチドキに話を聞いたところ、11階にはずいぶんと蟻が多いらしい。大亀はこのあたりの名物で有名らしいんだが、蟻のほうは聞いてなかったので驚いたんだとか。

本来なら執政院が動いてもいいんじゃないかってくらいの事態なんだが、あいにく執政院は執政院で10階の異常事態にかかりきりだ。なんでも、全冒険者通達とかいう聞いたことないものを出しやがったくらいの異常事態らしい。そんなにヤバいのかよ……あー、動きてえなあ。

・王虎の月、9日

うわ、うちのギルド、10階の難題をあつさり解決しちまいやがったよ……

マジ強いなあ助っ人二人。いや二人だけじゃねえ。カチドキも

イナ姉さんも、コルネオリもすげえ強くなってる。たぶん、あのケルヌノスに勝った自信つてのもあるんだろう。一気に強くなった感じだ。

取り残されてるのは俺だけだ。くそ。

・王虎の月、10日

眼帯のおっさんが、また無茶なこと言ってきやがった。

熊を一人で狩ってこい、だと。無茶言うなつての。誰が引き受けるんだ、と思つたらコルネオリが傷だらけで泣きながら帰ってきた。うええマジで勝つたのかよ。信じられ……なくもないか。コルネオリの堅さで防御固めてシールドで殴つてたら熊でも勝てないだろ。なんだかんだ言つてこいつもロッドテイルの弟子だからな。

そして俺の腕は今日も上がらない。まずいんじゃないのかこれ。

・王虎の月、11日

コルネオリの憧れのひとであるアシタから、それ精神的な理由でしよ、と言われた。

元はコルネオリの様子を見に來ただけらしいのだが、喋ってみてあまりのファイターっぷりに相手がメディックだということを忘れて話を振ってしまったのが運の尽き。本職らしく診察のまねごとみたいなのをした後、

「いや、たしかに怪我してるけどさー、びっくりとも上がらないって傷じゃないよこれ。腕が上がらないなら、べつの理由があるんじゃないの?」

「べつの理由?」

「そ。よーするにキミ、ブルっっちゃつてもう樹海に行きたくないんじゃないの? で、腕が上がらないのを理由にトンスラしようとしてるんでしょ。自分のギルドを妙に持ち上げるのも引退して文句言われないための伏線ね。やーいチキン野郎。なっさけないねーキミそれでも男?」

……言いたい放題言いやがるな、あの女。

パペールという、アシタお付きの線の細いレンジャーがめつちやペこぺこ俺に謝っていたが、俺はあいまいにしか返すことができなかった。アシタの診断は口こそ悪かったが、完全に当を得ているような気がしたからだ。

ああ。認めるよ。俺は樹海が怖い。

元から、そこまで才能溢れたソードマンだとは自分でも思っていなかったし、樹海に行つて大物に出会うたびに逃げたくなる自分と必死で戦っていた。

それでも、田舎から出てきて冒険者として大成するつて夢のため、どうにかこうにかやりくりしてきたわけだが、ケルヌノス戦で思い知ってしまった。ああ、この辺が限界か。と。

まだできないことはないと思う。でも、俺が強くなる限度はこの程度、というのが、なんとなく心に思い描けてしまった。そして、痛みとともに身体の一部が動かなくなる経験も、恐怖と共に刻み込まれた。そりや無意識に拒否反応が出てもおかしくないだろう。

……潮時、かねえ。そろそろ。

・王虎の月、12日

コルネオリからシヨロロに打診が来た。近いうちに出れないか、との話。

なんでも火力が決定的に不足しているらしい。蟻の大群に囲まれてとんでもねー大苦戦をしたとかで、鍛えれば戦力になるアルケミストが欲しい、とのこと。

……ま、俺には関係のねー話か。

・王虎の月、13日

シヨロロと大喧嘩しちゃった。

……いや、それもたぶん、俺が全面的に悪い類の。

打診が来てからなにかごそごそやっていたシヨロロだったが、今日起こしに行ったら俺が一瞬わからなかったらしい。

で、不審に思つて聞いてみたら、どうも一時的に記憶障害を起こし

かねない薬を飲んだようだった。そのおかげで集中力が激烈に増し、大氷嵐の術式を覚えることに成功したが、いくつか障害が残った。すぐ戻ると思うけど、いま必要なのは即戦力だからね、とシヨロロは言ったが、俺は我慢の限界だった。

怒鳴りつけた。なんでそんな無茶してまで樹海に行くんだ、そんなにして実力が落ちた状態で行っても満足に活躍なんかできるわけねーだろ、と。

最初はただ竦んでいた相手も、だんだん理不尽なことを言われていると感じてきたらしい。ふざけるなど言い合いになって——取っ組み合いの喧嘩になるのに、あまり時間は要らなかった。

いくら俺の腕が動かないったって、アルケミストのガキに遅れを取るほどナマっちやいねえ。シヨロロもすぐにそれを理解したが、それでも絶対、あいつは退こうとしなかった。絶対に倒せない俺に向かつて、感情だけで、何度痛い目に逢っても向かってきた。勝てないとかかっていても、決して退かなかった。

……今の俺はアイツ以下かよ。畜生。

・王虎の月、14日

土下座して謝った。

シヨロロはなんだかんだ言っただけだから、昨日の喧嘩を自分も悪いところがあると思いついてしまった。けど、それでお互い悪いと言って水に流すほど、卑怯にはなりたくなかった。アイツの前に、自分がそこまで嫌な大人になるのは許せなかったし、許したくない。

それで、いろんな話をした。昔のことや、これからのこと。

アイツは、親を尊敬していたし、親が自分みたいになれと言って付けた自分の名前を誇りに思っていた。だから親を真似てアルケミストになったけれど、なってから自分がアルケミストに向いていないって気づいたらしい。火を出す仕組みはわかってても、火よりも樹海の収集物や生物たちのほうに大きく心を動かされた。最初はアイツなりに立派にやろうと思っていたが、やがて疲れてしまったらしい。それ

で、使えないアルケミストを気取ってごまかしていた。

でも、今はそういうことを言っていられる事態じゃない。樹海は急速に、虫たちに食い潰されつつあるらしい。どこかにいる女王種を早く倒さないと、下手をすれば街まで蟻であふれかえりかねない。

だから、戦うのだ。大切な樹海を守るために、自分の死力を尽くさない。この際、疲れたとか言ってられないからさ、と言ってアイツは笑った。

……すごいな。俺なんか目じゃねえ。アイツは、たぶんこの街でもとびきり樹海が好きで、樹海のことを本気で考えてるんだろう。

俺はただ、一発当てるつもりでエトリアにやってきた山師。

アイツは、エトリア生まれで、エトリアの樹海を本気で愛する探索者。

……最初から勝負になってねえな。こりや。それでも。

できれば、コイツの力になってやりたいなあ、と思えたのは、少し救いだっただかもしれない。

・王虎の月、15日

グレイロツジの道場に通うことにした。

ホントは見学だけのつもりだったんだが、見ているうちに剣が振りたくなってきた。で、横造刀に手をかけた瞬間、マハにどやさされた。腕が動かないときに変な練習をしたら変な癖がつくからやめろ、と。……いや、正論だけだよ。くそ。

・王虎の月、16日

道場、2日目。

シヨロロは今日から樹海の探索に出るらしい。つつてもまだ第三階層に適用できるほど回復してないので、イナー姉さんとカチドキ連れて第二階層の奥に出かけていった。

……それでも十分すげえけどな。

俺は日がな1日、道場で稽古を見てた。つうか初めて知ったが、サ

シでやるとロッドテイルより強いのかな、マハって。どうりで俺とじゃ勝負にならないわけだよ。

・王虎の月、17日

道場、3日目。

ワテナとかいうブシドーのお嬢ちゃんを初めて見た。

すげえ。ネイホウなんて目じゃねえじゃん。やっぱありやダメなのか。いやまあ、レンと比べりゃ一発だけどき。

マハは、グレイロツジ最強の戦士はどうだった？　なんて聞いてきた。いやもう、感想もない。素振りしかしてないのに、その密度に怖気が走る。あの域には絶対辿り着けないだろうな、俺は。

とか言いつつ密かな憧れを抱いてしまうわけだが。ああ、剣振りてえなあ。

・王虎の月、18日

こつそり裏のほうで剣振ってたなら、案の定見つかった。

……それも、ロッドテイルに。

よりによってやばいのに見つかったら、案の定げんこつでぶつとばされた。怪我人が無茶してどうする、と、立派な戦士ですら竦み上がる大声で罵倒された。

それで、スイツチが入っちゃった。

うるせえ俺よりずっと年下のガキが死ぬ気で無茶やってるのに俺がこんなところで立ち止まってられるか、と、食ってかかった。相手は俺なんかが勝てるはずもないバケモノ重戦車だが、アイツだって俺相手に退かなかったんだ。俺も、ここで退いたらダメになると思っていたから、必死だった。

相手は、……驚いたことに、殴ってこなかった。

代わりに、息を思い切り吸い込み、近所中に響き渡る大声で大喝した。

「馬鹿か貴様は！

そこで流されてどうする！　その種の無茶を窘め、諫め、フォロー

していくのも年長者の責務であろうが！

そんな気分だからいつまで経っても樹海に戻れんのだ、このうつけものがあつ！」

——目が覚めた。

自分に足りないもの、それが完全に理解できたように思った。すげえなおっさん、俺のことなんてほとんど知らないくせに、俺より先にそれに気づいて喝破しやがった。

思わず礼を言うと、ロッドテイルは顔を真っ赤にして「ふ、ふんっ！」とか言いながら去っていった。……あー、あれはあれでわかりやすいタイプだわ。今までただの嫌な親父と思っていたが、認識を改めよう。

・王虎の月、19日

ロックエツジ最強の戦士、チ・フルルーと初顔合わせ。

グレイロツジからロックエツジに流れたという黄金の経歴を持つ彼女は、雰囲気だけならその辺の素人と変わらない。が、マハと雑談しながら片手で大斧ぶん回すのを見ると、やっぱり超人の類だと思う。あれなら人間も片手でぶん回せるだろーな。たぶん。

で、その彼女に現状を率直に告げて相談してみたところ、

「んー、わたしは斧使いですから剣のことはよく知りませんが、

ギルドにアルケミスさんがいらっしやるなら、蟻は氷に弱いので……そうですね、氷の追撃を仕掛ける類の剣技を覚えられてはどうでしょう？」

と、すげえ的確なアドバイスをもらった。感謝。

樹海のほうは、相変わらず。シヨロ口もだいぶ元の勘を取り戻してきつつあるようだ。

……じゃあ、俺もがんばらないと。

・王虎の月、20日

嘘みたいに腕が軽くなってきた。

大事を取って訓練は明日からってことにしたが、ここまで早いと

は。やっぱ精神的なアレかね……あーやだやだ。自分のことながら、うじうじしているのは見てて嫌気が差す。

そしてナリアンテスが引退。今のシヨロ口なら、自分がかんばるまでもないだろうというこころしい。顔は悪いがけっこうな使い手だったな。機会を見て、俺からも礼を言っておこう。

・王虎の月、21日

すげえぞ俺。怪我する前より調子いいんじゃないのかこれ。

とか思ってたら案の定マハに注意された。無理しすぎ、と。いやーまあはしゃいでるのは自覚してます。でも自分とは思えないほど剣の振りが早い。こりや復帰もだいぶ早くできそうだ。

・王虎の月、22日

調子に乗ってマハと立ち稽古。

相変わらず相手にならなかつたが、瞬殺だけはされなくなった。終わったあとで、成長したねーとマハに頭を撫でられた。……いや、それは外見的にどうなのか。

・王虎の月、23日

コルネオリから、明日までに復帰できないか、と打診が来た。

ネイホウが、蟻との戦いで無茶をしすぎたらしい。いやーセツシャあの量は勘弁して欲しいでござるよニンニンとへらへら笑いながら言っていたが、他のメンバーから聞くと本気でシャレにならない量が押し寄せて来たそうだ。奮闘しなければ全滅の危機だったそうだ。あいつもよくがんばってくれたなあ……俺も、がんばらないとな。

・王虎の月、24日

状況は、思ったより深刻だった。

フロントラインは第二階層の磁軸手前。そこから先は蟻が埋め尽くして、もう目も当てられない。執政院はふたたび全冒険者通達を出して12階にいと目されている女王蟻を狩ろうとしているが、グレ

イロツジやロツクエツジ、レン&ツスクルまで動いているのに、未だに女王の巣を発見できていないらしい。

マジで蟻だらけ。勘弁して欲しい。俺けっこう虫苦手なんだけどなーと言ったらシヨロロに笑われた。むかつく。

・王虎の月、25日

12階でアシタ達と遭遇。

女王を捜している、と言ったらアシタは眉をしかめ、

「キミたちじゃ無理じゃないのー？」

あれ戦つてるとどんどん蟻が寄ってくるから、大火力ないときついよー？ なに、そっちのアルケミストはグレイロツジの毒使いみたいなバケモノなわけ？ ハイキラーアント何発で倒せる？ 1発？

それとも2発？ え、4発だつて？ 論外ね。出直してきたら？」

と挑発ぎみに言い放った。アレもホント容赦ねえ性格だな……シヨロロは終始、すっげえ不機嫌そうだった。まああれだけ言われりやな、とフォローのつもりで言うのと、そうだよあの女、たいして面識もないくせにアイノテに馴れ馴れしくして何様のつもりだつ、とか息巻いてた。いや、怒るのはそっちなのか？

・王虎の月、26日

遭遇は、偶然と言つてよかった。

執政院に渡された地図には書かれていなかった謎の空洞にいた、それまで見たことのない体躯の大蟻。シヨロロは見た瞬間に相手の正体を看破し——当然、迷うことなく突撃。困った奴だが、フォローする準備はできてる。大いにやれ！

幸い、遭遇戦だったのは相手にとつても同じだった。まわりの蟻たちが集まってきて、俺たちを迎撃する準備が整うまでには、コルネオリの指示によって俺たちは隊形を整えている。だが、相手は予想外に堅かった。シヨロロが呼び出した氷の塊を相手にぶつけながら、ダメだ、出力が足りないよ、と悲鳴を上げる。

……つたく、そんな程度で悲鳴を上げるなら突撃なんてするなっ

っーの。

属性の選択は悪くねえ。火力不足は未熟が原因だが、それはもうどうしようもねえ。だから、そいつはこっちでフォローしてやるさ。

俺は剣に仕込んだ仕掛けを起動し、叫んだ。

——チエイズ・フリーズ！

周囲の蟻は、俺の攻撃込みで2発で倒せる。

それはありがたい事実だったが、他の火力がコルネオリのシールドスマイトしかないというのはいかにもきつい。それでも、最後は時間との勝負で、こちらの根気（と、ネクタル）が尽きる前に相手の体力がギリギリ尽きてくれた。

正真正銘、ケルヌンノスなんか目じゃない大物の撃破。勝った後、しばらく俺たちは呆然としていた。うわ、勝っちゃった、とか言ったのが最初に突撃したお馬鹿さんだったことは、この際目をつむることにしよう。

ああもう、ともかく疲れた。達成感とかどうでもよくてとりあえず惰眠をむさぼりたい。なのに、酒が入ったコルネオリはなかなか離してくれなくて、結局相当夜が更けてから寝床に入ることになっちゃまった。あいつも、酒飲むとグチっぽくなる癖さえなきやいい奴なんだがな……

第三階層（2）：探索、捜索、そして空振り

・王虎の月、27日

なにも言わずに全員休息日。コルネオリは昼になつても降りてこねえ。まあ、あれだけのペースで酒あおればそうなるわ。つうか、そのペースを同じように保っていたカチドキがピンピンしてるのが逆に不思議だ。あんなの飲んだうちに入らないっすよ旦那ーとか言ってるし。ちなみにイナーの姉さんは早々に酔いつぶれ、早々に寝たせいで逆に今日の寝覚めは最高だったそう。シヨロロ？ ガキは酒なんて飲むもんじゃねえ。

で、ぼーっとしてたらすつつっげえ不機嫌そうな顔をしたアシタがやってきた。よくやってくれたわね、キミたちは街の英雄よ……つて、棒読みで言うなよ怖いから。そんなに狙ってた相手を狩られたのが悔しいのか。と思わず言ってしまうと、アシタはめっちゃ怖い目でこつちを見た後、

「まあいいわ。これからキミたちは後輩じゃなくてライバル決定だから。」

——ケケケ、ロックエツジを敵に回したこと、後悔するがいいわ」とか不気味に笑って去っていった。

後でパペールがフォローに来たが、アレも苦労するタチだな。つたく。……お互い様か。うちの鉄砲玉は終始ザマアミ口って顔してたし。

・王虎の月、28日

樹海探索に戻って1日目。

依頼を受けて石ころを探したら珍しいことに金色の毛皮の野牛と遭遇。ちよつと警戒しつつ突撃してみたら防御陣形を指示しようとしたコルネオリが一撃でトバされて泣きそうになった。その後力を貯めて突撃してこられそうになって、またそのあたりの通路が突撃を避けられるような場所じゃなかったんで本気で死ぬかと思ったが、例の大氷嵐の術式↓チェイスフリーズのコンボが思いの外効いたお

かげでかろうじて勝てた。マジで死ぬかと思ったぜ……

で、帰ってマハにその話をしたら、

「え、それ凄いなー。たぶん23階くらいの獣だよ」

とか言われた。マジか。ていうか、裏を返せば23階ってあのレベルの獣がゴロゴロしてるんですか。行きたくねえ……と言ったら、

「まー、でも24階のアーマービーストよりは断然弱いんだけどねー。執政院の記録じゃ、危険は少ないとか寝言書いてあるんだけど、なにを勘違いしてんだろーね」

と返された。訂正。行けるかそんな魔窟。

・素兎の月、1日

13階に到達。

で、ザコ獣どもと戦っているとふと凶悪な気配を感じることが多いんだが、いったいナニが隠れてるんだよこの階層。勘弁してくれ……この階の主なんかと出会ったら、いまの俺たちには勝てる気がしないんだっつーの。

・素兎の月、2日

今日、同じように凶悪な気配を感じつつ戦闘を終え、ふと背後を見ると木の影にこそつと隠れようとした蟹の姿。

うわなんだあれ、と思った時には、シヨロロがいつものように突撃していた。ええい迷惑な。後で説教な……って今はそれどころじゃねえ。攻撃開始！

で、弱かった。拍子抜けするほど。妙にカチドキばつか狙われていたのでカチドキだけ泣いていたが、後はまったく被害もなく勝利。こここそ隠れたり女ばつか狙ったり、妙に人間的な蟹だ……まさか中に人が？

それで、調子に乗って主っばいワニに突撃したらぞろぞろワニ共が集まってきて死ぬかと思った。あとで執政院の記録見たらあっさりそういう習性だと書いてあった。今度から調べて挑もう。

・素兎の月、3日

以前からカチドキが、3階に山賊王エドゥとやらの宝が眠っているという噂を仕入れてきていた。

いやまあ、ぶつちやけガセだとしか思えないわけだが。酒の席でそう言ったら、奴はムキになっちまった。わたしのネタが信じられないのかテメエーとか言って。酔ってない顔してしつかり酔ってやがるなこいつ。

で、なだめるためにとりあえずテキトーに調査だけして帰ろうと思ってた。ぶつちやけカマキリはトラウマになってるので、あんまり3階には寄りつきたくなかったんだが、まあそれはそれ。

そして、俺たちは迂闊にも、準備なしにソイツのねぐらに踏み込み込んだ。

女王蟻のときにも感じた、あの死に至る戦慄が駆け抜ける。相手は――まさに、その規模の奴だった。

見た目は石の像。だが生き物のように動き、とんでもねー勢いで攻撃三連。バックガードと防御陣形を駆使しても、シヨロロに飛んできた日には運次第でぶっ倒れる。火力はそのシヨロロの大氷嵐の術式と、俺の追撃のみ。単純な打撃はまったく効果なしときた。

まあ、相性はよかった。相手は自動再生機能の持ち主だったが、あいにくこつちにはその手の能力を封じることにかけてはプロがいる。因縁の3階、ボールアニマル相手にカチドキが習得した沈静なる奇想曲が、はつきりと明暗を分けた。

ま、カチドキ的には、山賊王の宝がガセだったせいで落ち込んじゃまったみたいだが。奴のおかげで生き延びることができたのも事実なんだし、そう悪いこともないんじゃないかね。たぶん。一応お尋ね者の怪獣だったらしく、賞金ももらえたし。

・素兎の月、4日

で、めげるといふ言葉を知らないのがカチドキというヤツである。ぶつちやけちよつとはへこんでおけって感じだが、どうにかならんのかこいつ。

即座に水面に投げ捨てようとしたシヨロロを一応制止して宝物を吟味。お、これ、昔手に入れた水晶と似た形してやがる。これなら、いまままで開いてなかったいろんな扉も開くんじやないか……？

ふと横を見ると、シヨロロが涙ぐんでいた。いやおまえ、泣くほど悔しいか？ と聞いたらぶん殴られた。なんでだよ……まーしかし、じつを言うと俺はあんまり悔しくないんだよな。いつつも疲れた顔してるロックエツジのレンジャーに妙な親近感を覚えてるからかな。そんなことを言ったらまたぶん殴られた。自覚はあるんだな……

そしてカチドキはもうこれ以上ないくらい落ち込んでいる。まあ、こんなんでもどうせ、明日には誰より血圧高い状態で迷宮行こうと言ってくるんだろう。懲りないやつである。

・素兎の月、7日

もうこうなりや下の階層を目指すしかないってんで、15階への階段を探そうとカチドキは言う。そりやおまえ、見つかったら苦労はしねえよ。まあ、探しているんだがな。

マハあたりに聞けば一発で教えてくれるんだろうが、あいにくグレイロツジはここしばらくぶりに本格活動を再開したらしく、捕まらな。まあ、それ以前に困ったときにすぐ人脈に頼るのも冒険者らしくねえしな。

ちなみにコルネオリは、アシタさんに聞いてくるつ、と無邪気に言つてシヨロロに殴られた。まだ機嫌悪いのかよ……

・素兎の月、8日

迷宮、15階到達。

……した途端、すごいものを見た。

グレイロツジが苦戦している。とんでもねえ大きさの竜——後で聞いたところ、氷嵐の支配者とか言うらしいそいつが、一軍フルメンバーのグレイロツジと格闘していた。

ロッドテイルが防御陣形を、マハがフリーズガードを宣言する。ム

ズピギーが沈静なる奇想曲で相手のガードを打ち消しまくり、そしてその隙についてオコナーとワテナが炎をたたき込む。

理想的に近い連携を見せながら、しかし竜には一向に効いていないように見えた。ぶつちやけ、あれは人間に倒せるレベルの竜なのか？

とか、そんな呑気なことを考えている余裕は、どうやらそのときの俺たちにはなさそうだった。騒動を聞きつけて、このあたり一帯の主、空飛ぶエイことコロトラングルが攻めてきたのだ！

マハに言われるまでもなく、背後の守りは俺たちがやるしかねえ。圧倒的な死の気配にももう慣れた。やるしかねえなら、やつちまえ！

強大な力に何度も屈しそうになったが、かろうじてメデイカが底を突く前に相手の体力が底を突いた。都合14撃。大爆炎+チエイスファイアをただひたすら連打し、相手のガードを、ここはグレイロツジと同様に、カチドキが打ち崩す。コルネオリは防御に専念。イナー姉さんは回復に専念。だんだん、戦い方が決まってきた気がする。

まあ、よく保った。一度シヨロロが前に出すぎてトバされたが、そのくらいは立て直せる程度の力もついてきた。なんとか相手を下して後ろを見ると、ちょうど傷ついた氷竜が湖の奥へと逃げていくところだった。助かった……

帰るつもりだったのだが、グレイロツジが16階の樹海磁軸まで案内してくれると言うので甘えることにした。ホント、こいつらは人格者だよなあ……もうひとつのエースギルドとは大違いだ。

第四階層（1）：栄光、悲劇、そして敗北

・素兎の月、9日

帰ったら英雄になってました。

いやマジで。なんか気がついていたら、グレイロツジと共闘して氷嵐の支配者を撃退したということになってた。無理だからそれ！ と慌てて訂正したが、事情通どもにはコロトラングルを単独で倒したことのほうも知れ渡っていたらしい。なんでも15階はあのエイを刺激しないようにそーっと進みましようってのが定番になっていて、アレを倒したギルドなんて今まで数えるほどしかないそう。そういうのは早く教えてくれよ……しかもアシタがことあるごとにライバル視しているということまで暴露され、ロックエッジのライバルギルドとしてエトリアにおける我がギルド、ホイスビーの株がいきなりストップ高に。

……勘弁してくれないかなー。あんなの二度とやりたくないし、俺たち結局は凡人の集まりなんだけどなー。こらシヨロロ、ちよつと褒められたくらいでいい気になってんじゃねえ。

・素兎の月、10日

いい気になった結果、全滅しかけました。マル。

いつものごとく発端はカチドキ。なんでも執政院からの依頼で、飛竜が最近うるさいから原因を調べてきてくれ——って、あの飛竜かよ！ って感じだったんだが、まあシヨロロは思いつきり乗り気だったし、倒せて話でもないから一応行ってみるかーと8階に行ったらいきなり襲われた。タスケテ。

そんでもって、がんばって善戦したんだが、コロトラングル戦後のアイテム欠乏期でぶっちゃけ回復が追いつかねえ。イナー姉さんが倒れ、カチドキが倒れ、新型ネクタル使ってコルネオリを復活させたタイミングで俺が狩られた。後は記憶にないのだが、聞いたところによるとシヨロロがコルネオリに先読みでネクタルを投げつけるという神の一手が功を奏し、ギリギリ二人だけで撃退したらしい。飛竜は

泣きながら飛び去っていったとか。

そして俺たちの名声はさらに上がる。バカ言うなつての。あんなまぐれ勝利まで実績にカウントされてたまるか。

・素兎の月、11日

16階以降、第四階層は通称枯レ森と言う。ぶっちゃけ水がない。最初に見たときはマジびびった。そのくせ、獣は普通に多いときてやる。どっかに隠れた水場でもあるのかねえ？

で、樹海磁軸を出たところで、へんな女と出くわした。コロトラングルを傷つけたのは貴様らか、とか聞いてきやがる。もしやこいつが噂の亜人間、モリビトって奴か？　と思つて尋ねると、質問に質問で返すとは何事かと激怒された。

モリビトというのは、グレイロツジが見つけた樹海の奥に住む亜人種だつて話だ。いろいろあつて一時、エトリアの街とは戦争状態にまでなつたらしいが、グレイロツジがいろいろやった結果、なんとか収まったとか。だが未だに人間に怨恨を抱えているモリビトも多く、油断してはいけない——そんな話を、噂で聞いていた。

で、たぶんそのモリビトだろうそいつは、あのエイを傷つけられたことにいたくお怒りらしい。樹海の守護者たるありがたい御方になんてことを、とか言われてもなあ。あれ明らかに正当防衛だろ。と言つたらさらに激怒された。誠意がないらしい。

もう面倒になつたので適当にあしらおうとしたところ、そこに通りかかつたのがロックエツジのザ・軽薄ことバードのチクタク。お、かわいこちゃんはつけーんねえねえ名前なんて言うの？　とか空気も読まず聞き出したのでモリビトのモリコだと適当に紹介したらぶん殴られた。私はそんな変な名前じゃないっ、だそうだ。……そんなに嫌だつたのか、モリコ。

で、結局うやむやになつて物別れに終わった。あいつ、なにしに来たんだ？

・素兎の月、12日

気を抜いてたら一気に、俺とコルネオリが持つてかれた。

で、久々にケフト施薬院を訪れたわけだが、なぜかやたら高かった。院長いわく、いままでが割引していたわけで、一流の冒険者であるおまえ達にはもう割引なんていらんだろ、とのこと。

そうか……そんな風に言われるようになったちまつたんだなあ。いまいち実績がない気がするからよくわからんが、そういうことらしい。

・素兎の月、13日

風雲急を告げる、とはこのことだ。今日、ロックエッジが壊滅した。壊滅、というのは文字通り。かろうじて動けたパベールの機転によつてなんとか撤退だけはしてこれたらしいが、大打撃を受けた。パベールとチ・フルルはそれでも立って動けるが、ハラヘルスとカチノへはしばらく病院生活だそうだ。

で……ああ。自分でも思い出すのが嫌だったんだが、アシタはひどいもんだった。前線ですつと一人で時間を稼ぎ続けた結果そうなたらしい。怪我というより、壊れたと言う方が正しいような惨状。一命はそれでも取り留めたが、動けるようになるには早くても3ヶ月。それも元の動きができるようになるかはわからないらしい。

シヨロロには、面会を許さなかった。刺激が強すぎると思ったからだ。それでもいろいろきつかったらしく、いま部屋に籠もって泣いている。まあ、あの歳のガキにはシビアだろうさ、今回のことは。正直、俺だつてシヨックだ。

それにしても、意識を取り戻した第一声がヤローテメーぶつ殺してやるつっーのはさすがアシタ。ぶっちゃけアイツがこのままくたばるなんて想像できないが……それは樂觀が過ぎるか。

・素兎の月、14日

樹海の奥の奥。第六階層と言われる場所がある。

ロックエッジが壊滅状態になったのは、そこだった。ハラヘルス曰く、オバケに襲われた、とのこと。なんのことだか俺はさっぱりだつ

だが、一緒に来ていたマハが即座に返した。それはヴィズルのことで
すか、と。ハラヘルスはうなずいた。

その時点で俺はなんだかわからなかったが、マハはこれ以上言えな
いという。——どーもきなくさい。その場の判断ですぐそこを後に
した俺は、カチドキを捕まえてヤバキーワード、ヴィズルについて調
査するように頼んだ。餅は餅屋だ。

で、3時間で調べてきた結果。ヴィズルは前の執政院の長で、モリ
ビト戦争の引き金を引いた黒幕であるが、彼がなにを考えていたのか
は誰にもいまいちわからないらしい。わかっているのは、彼がグレイ
ロツジを抹殺しようとして返り討ちにあったこと、それからグレイ
ロツジとロックエツジがこここのところ第六階層を探索していたのは、
その辺の調査をするためということだ。

どうしてそこまで早く調べられたのか聞いてみると

「え、ロッドテイルさんに直接聞いただけだよ？」

……ペラペラしゃべっていいのか、あの親父。たぶんバカだから簡
単に誘導尋問とかに引つかかったんだろうな。もしくはあいつ、実
は若いバードの女の子に弱いのか。そういやあのギルドのムズピ
ギーもそのタイプだったな。

で、さらに調べるためには樹海のもつと奥を調べるのがいちばん
手つとり早そうなのだが、困ったことに執政院からやばい通達が出
た。16階の樹海磁軸の使用禁止、及び18階以降への立ち入り禁止
ときやがった。なんでも、グレイロツジが今回の件について調査して
報告するまで、深い階層は危険だから出入りを全面禁止するそうだ。
……いきなり足を封じられたな。

・素兎の月、15日

シヨロロが暴発した。

アシタの敵討ちだとか言って、いや待て執政院の通達があつてだな
と説明するこつちの言も聞かずに飛び出した。バカ、一人でなにす
気だ阿呆。慌てて仲間を集めて後を追ひ、たぶん最寄りであろう11
階の樹海磁軸にやってきたらあの野郎、そこで待ってやがる。俺を見

てにたーと笑って、

「来ると思った。さ、行こうか」

……ま、負けた。なんかすげえ敗北感。つーか最近俺はあいつの尻に敷かれてませんか。とつぶやいたらカチドキが驚いてリユートを取り落とした。……それは今更気づいたのかって反応ですか。ガツテム。

まあ、実際は準備もしていなかったことだから、1日待って明日から出発することにしたわけだけど。それでも、シヨロロの嬉しそうな笑顔を見ると、つい、あー流されてるなーでもまあいいかという気になってしまう。ヤベエな。俺もロッドテイルのおっさんの悪口言えねえわ、こりや。

・素兎の月、16日

こっそり女王蟻が復活、部下を生み増やしつつ潜伏していたのに出くわしたのだが、もうまったく完膚無きまだになにひとつさせず勝利。だいぶ強くなったんだなー俺たち。特にイナー姉さんの新必殺技、アザースステップが超強い。あのひとも地味に進歩しつづけるひとだよな。ひとりじゃぜったい戦えないが集団戦で真価を發揮する。

で、17階に初めて到達。した途端に例のモリビトの女、通称モリコが待っていた。なにしに来たのかと思っていたら、なにしに来たんだおまえらと聞いてきた。下の階を目指していると云ったら顔をしかめて、いま行つてはダメだと言う。なぜ？ と聞いたら、どうも下の階から変な怪物が上がつてこようとしているので、危険だから行くべきじゃないと止められた。

なんだよ、心配してくれてるのか。と言ったら顔を真っ赤にして人間の心配なんか誰がするかと一喝された。こいつもロッドテイルと同じクチか……おいシヨロロ、なんでおまえ不機嫌そうにしてるんだ？

ともかく、忠告はありがたく頂いた。注意しつつ下を目指すことにすると云ったらなんにもわかってないな貴様！ と怒られた。いやまあ、モリコの気持ちはわかったからと言ったら、うわああんモリ

コつて言うなーと叫んでどつか行っちゃった。……いい名前だと思
うんだけどなあ。モリコ。なんかカチドキとイナー姉さんはおまえ
が悪いって顔してる。シヨロ口は最初からおまえがなにもかも悪
いって顔してる。コルネオリは終始なにも考えてない。なんか、俺た
ちのギルドにも変な役割分担がでちゃったな。

そして体力が尽きて撤退。17階は規模の割に複雑な迷路だ。特
に、片側からは容易に通れるがもう片側からはなかなか通れない木の
通路が多すぎる。なんつーややこしい……

・素兎の月、17日

死ぬかと思った。

氷の剣士、レン。呪い師、ツスクル。最強の冒険者にして俺たちの
共通の後援者であつた彼らが、突如として牙を剥いた。

場所は18階の水飲み場。さして大きな獣もおらず、平和な枯れ木
の大平原の中に、いきなり鈴の鳴る音が響いた。

なんだろうと思ってそちらを見ると、そこにレンとツスクルがい
た。いつものように——レンはいつも厳しい顔だし、ツスクルはいつ
も陰鬱だ——、いつもするように立って、ただしレンは刀に手をかけ
ていた。

ここでなにをしているんだと聞くと、それはこちらの台詞だ、たし
か全冒険者通達が出ていて18階は立ち入り禁止だったはずだが、と
答えが返ってきた。そりゃアンタも同じだろ、と言うと、レンは苦笑
して、……そして、刀を抜いた。

なんでだ。なんでアンタたちと戦わなきゃならない。そう尋ねる
と、レンは涼しい顔で答えた。なに、このまま地下に行っても君たち
の実力では生きては帰れまい。ならばここで死んでも同じこと。
さっさとくたばれ小僧。

悪夢みたいな戦闘が始まった。

戦う意志はあつたが、相手の剣はまるで見えなかった。それでも経
験から相手の剣筋を予測して一合、二合。三合めが来る直前に割り込
もうとしたコルネオリが、一足で盾の内側まで踏み込まれ、当て身で

吹っ飛ばされた。一撃。あのコルネオリが一撃でだ。冗談じゃねえ
と思つていたら俺のほうに剣が来て、アザーズステップで俺と入れ替
わったイナー姉さんが峰で打たれてぶっ倒れた。急に歌が途絶えて
後ろを見たら、ツスクルの手から伸びたツタがカチドキの喉にからま
り、吊り上げて窒息させているところだった。そうしてよそ見した俺
は——次の瞬間、どこに攻撃を受けたかわからないほどの衝撃を受け
て、吹っ飛ばされて地面に転がった。

シヨロ口は、最後までがたがた震えてなにもできなかつた。そのせ
いか、レンもツスクルも彼女には手を出さなかつた。

「弱い」

簡潔に、レンが言った。

「とても弱い。これから死の階層に挑まんとする冒険者がこの体たら
くとはな。——笑わせてくれる」

うるせえよ。笑い顔なんて見せたことないくせに。

つぶやいたら、レンは修羅のような笑みを見せた。

「その、小さな脆い腕で、なお——下に赴く気か」

当たり前だ。俺は退かない。

「なぜだね。君たちはもう、十分に富と栄誉を手に入れている。実力
に不相応とまでは言わないが……なあ。この辺でいいんじゃないの
か、アイノテよ。もうそろそろ君たちはやめ時だ。そうは思わない
か」

初めて。

レンの瞳が、本気で俺の瞳をのぞき込んだ。

ああ、そりやそうだ。俺はもう、ケルヌノス戦で思い知った自分
の実力限界にとっくに達している。

最初に会ったとき、レンは俺には絶対に勝てないと思った。実力差
がありすぎてその差は見えていかなかったが、直感的にそう思ったん
だ。いまなら断言できるが、その直感は正しかった。なまじ強くなつ
た分、レベルの差がはつきり量れちまう。

——だがよ、レン。

悪いが退くつもりはねえ。俺はそれでよくても、後ろの奴がそれ

じゃ嫌だつてうるさいんでね。

レンはその答えを聞いて、ため息をついた。

「21階で待つ」

言つて、きびすを返す。

「モリビト達には知らせておこう。君たちはなんの遠慮もなく、いつでも21階で私に挑戦するがいい。

そして死ぬ」

……正直、それ以上は覚えてねえ。悲しそうなレンの瞳、それだけしか記憶に残っていない。

次に目が覚めたとき、俺はケフト施薬院のベッドの上で——そして、ベッドの側に、泣きながら俺の手をにぎっているシヨロロがいた。渡された試験はたったひとつ。

レンと、ツスクル。21階に赴き、あの最上級の冒険者に打ち勝たなければならぬ。

第四階層（2）：試練、試練、そして試練

・素兎の月、18日

マハが、16階の樹海磁軸使っていいよ、と言ってきた。

……すっつげえ複雑な顔してたので聞いてみると、ねえ、なんかレンさん怒らせるようなことした？ と聞いてくる。あいつが手を回したのか……で、怒らせること？ 俺が知るか。相手に聞いてくれ。

で、21階で相手が待っていることを告げると「嘘!？」と驚かれた。なんでも、現在は24階あたりまで第六階層の敵がちらほら出没していて、なにかあると21階でも十分危ないんじゃないか、という。

さらに続けてマハは、

「アイノテ達がいまレンさんたちと戦ったら、まず勝てないと思うよ」と言う。そりやそうだ。なにしろ手も足も出なかった。

一応なんでそう思うか聞いてみたら、

「だってわたしたち戦ったことあるもん。あのふたりと。21階で。

わたしたちだけじゃなくて、たぶんロックエッジもね」

……参った。やっぱりグレイロッジはすげえ強いんだな。そう言うのと、マハは複雑な表情で首を横に振った。

「わたしたちは勝ったけど、レンさんは満足してくれなかった。

たぶん、いまでも彼女はわたしたちに負けたと思っていけないんじゃないかな。たぶんね」

シヨロロは部屋から出てこねえ。そりやそうか……なんだかんだ言つて、人間と戦ったのなんて初めてだしな。誰だって怖いさ。俺もな。

——それでも。

あいつがいつか出てきたら、絶対に潜るって言い出すと信じている。

だから、できる限りの準備はしておかないと。

・素兎の月、19日

グレイロッジの道場で体当たりにレン&ツスクルの攻略法を聞

いてみたら、どうも奴らは4人がかりでツスキルを抑えている間にワテナがレンと一騎打ちで倒したらしい。……それはもうぶつちやけ人間の所行じゃねえな。

一応、当のワテナに攻略法を聞いてみると、
「え、踏み袈裟連打しただけけど。」

だってあのひと刀を鞘に収めようとするんだもん。それって居合使いで首打ち屋で即死させマツシャーっつーことじゃん？ じゃあ構えなんて使う前に手数で押すしかないじゃん」

参った。こりや参考にならん。

で。なんとか俺たちがレン&ツスキルと戦える方法はないかともんなで知恵を絞った結果、なぜかその場にいたナリアンテスが

「あら、じゃあワテナちゃん並にアナタが強くなればいいのよ。手始めに例の試練とかどう？」

とか抜かしやがった。無理言うなっつーの……て、例の試練？

え、13階の出歯亀蟹を一人で倒せて？ 誰ができるんだそんなの——えーと現在成功者3名、レンとワテナとアシタですか。全部超人じゃねえかよ！ と言ったらロッドテイルにぶん殴られた。根性が足りん！ だいたいその3人が試練挑戦当時から超人だったとでも思っているのか！ と抜かしやがる。横でマハがぼそつと、でもアシタさんはあのころから無敵だったよね……とつぶやいていたがロッドテイルは無視。さらに試練を受けることが確定しちまった。ガツテム。生きて帰れるのか俺。

・素兎の月、20日

せめて攻略法をと思つてマハに聞いたらロッドテイルから口止めされてました。

さらに執政院が急に樹海データを出し渋るようになりました。すげえ。政治パワー全開で俺の卑怯活動を封じる気かよ。カチドキに頼む、という手も考えたが、考え直した。なんとなく、奴も面白がつてロッドテイル側に回りそうな気がしたからだ。

とはいえ、あの蟹はたしかものすごく殻が固かった記憶がある。

シヨロロとのコンビネーションに頼れないっつーのは痛い。俺の戦法、全部あいつとのコンビで考えてるからな。

……そういう意味では。あの戦闘は負けて当然だった。シヨロロが戦おうとしないときの俺は、ぶっちゃけ第二階層から進歩してない。身に付いたのはコンビネーションのやり方だけだ。

つまり俺は一人で戦うタイプのソードマンじゃないわけで——オイ、心底意味なくないかこの訓練。

気を取り直して考える。まだ超人じゃなかった頃のレン、あいつはいつたい、どうやってこの訓練を乗り越え——抜刀氷雪。考えるまでもねえ。

では超人……なりたてだった頃のアシタ。あいつはいつたい、どうやってこの訓練を——医術防御棍棒棍棒棍棒死ねやオラ。はい簡単ですぬ。ハハハ。

最後に、ワテナを考える。超人じゃなかった頃のワテナは——あれ？

マジでどうやって対応したんだアイツ。ぶっちゃけ踏み袈裟至上主義の奴にとつて卸し焰なんて遠い存在だったと思うんだが……と考えると、気づく。オイル。

速攻シリカ商店に走った——が、時すでに遅し。ごめんねーさつきロッドテイルさんが大量買い付けしていつちやつたんで売り切れなんだーやーグレイロツジって金持ちなんだねーでもアレすぐ使うのかな倉庫に入れてたら劣化しちゃうんだけど。ガツテム遅かった。こうなりや、いちかばちかのトルネード連打で押すしかないか……いやそれともスタンスマッシュをチ・フルルーに教えてもらうか……でもそんなに時間ないし……あーもう、あの親父は俺を生かして帰す気があるのか!?

・素兎の月、21日

ぶつつけ本番と腹くくってギルドを出た直後、思いつき後ろから引っ張られてひっくりこけた。

引っ張った張本人は案の定、ずっと部屋から出てこなかった馬鹿者

だった。テメエなにしやがんだシヨロロ、と言ったら、忘れ物だよ、と言つて小さな瓶を渡してきた。——オイル。どこで買ったんだと聞いたら得意げに、ボクの職業を言つてごらんアイノテと……手作りかよ。やべ、初めてこいつに心底感謝した。

いやもう、そうなたらぶつちやけ負ける気がしねえ。即座に挑戦し、回復アイテムが尽きるギリギリ手前で勝利。いっぺんやばいところに攻撃が当たつてヒヤヒヤしたが先読みが功を奏して死なずに済んだ。ラツキー！

・素兎の月、22日

よし次はうごめく毒樹だ、とか言われました。いい加減にしてくれ……

要は、神速で相手をたたきのめす攻撃力を身につける、ということらしい。俺がそんな早い成長速度を保てるかってーの。

で、相変わらず買ひ占め&嫌がらせモード全開のロッドテイルの目の前でシヨロロに、じゃ、ファイアオイル作つてくれな、と言つたらすごい罵倒された。ふふんなんとでも言え。試練の条件にオイル禁止とか書いておかなかつたテメエが悪い。

で、その日のうちに作つてもらつたファイアオイルを使つて速攻撃破。ぶつちやけ、ダブルアタック使つたらオーバーキルだったな……蟹よりずっと弱いじゃねえか。

・素兎の月、23日

試練その31。

なんか白き姫とか自称しちゃう貴族の困つたちゃんがいつものようにデムパを受信して眠れないーとかいうことなんで助けてやれ。つてそれメデイックが睡眠薬調合すれば終わりじゃね？ と思つたが、そういえばグレイロジツてメデイックいないんだな……ていうか、明らかに自分のトコに来たはずの依頼を横流ししているんだがいいのかこれ？ あと試練の意味はどこに。ぶつちやけロッドテイル迷走してねえか？ と聞いたら目を逸らしやがった。凶星か

よ。

で、アシタはあのぎまだしどうしたものかなーと思つたら、折つた腕を包帯で吊つてぶらぶらしているカチノへ発見。雑談の中でその話をしてみると

「昏睡の呪言……なら……効くかもね？ ふふ……」

だから怖いっておまえ。まあ善意で協力してくれるっつーから連れて行つてみたら、あんまり効かなかつたんだがなぜか超感謝された。ぶつちやけ眠れないことそつちのけでカチノへにまわりついでたが……デムパな上に少年愛嗜好かー。いい根性してるなお嬢ちゃん。

まあ報酬というか追い出し料みたいな感じでもらつたキタラはずいぶんいい物だつたらしくカチドキはめちやくちや喜んでたけどさ……あれ、ほつといつてよかつたのかねえ？

・素兎の月、24日

昨日日記書いたあとで酒場でネイホウとちびちびやつてたら、デムパ姫がすつげえ勢いで駆け込んできた。なんでも、滅茶苦茶怖い夢を見たのであれぜつたい正夢だからなんとかしろつて……なんとかしなきゃいけないのはおまえじゃね？ とか失礼なことを思ったが、もしや昏睡の呪言がへんな作用をもたらしたんじゃないかと思つたのでカチノへに聞いてみたら

「どつちかつていうと……縛りが効き過ぎた？ ふふ……昨日はすごかつたから……」

……聞かなきゃよかつた。なんて嫌なガキだ。

で、帰ろうと思つたところをカチノへに呼び止められて、

「僕も……正夢、だと思ふよ？」

なんでだ、と聞くと、

「だつて今日、……来るよね？ 1階に。すごいのが」

来るよね、じゃねえよ。そういうことは早く言え！

でグレイロツジに報告しようとしたが、探索中つていう話だったので無理。俺たちが迎撃するしかないのかよ……勘弁してくれ。

そして撃退。す、すっげえ強かった……なんだあのバケモノ、と思つてあとでカチノへに聞いたら、たぶん下の異変で追い出された第四、第五階層の獣たち、だそうだ。どうりで強すぎると思つた。

ちなみに執政院からアウロスが報酬として出た。カチドキ大喜びだが、ぶつちやけこの試練つてヤツだけが得してないか。まあ、結果的にはいい訓練になった、とも言えるのかもしれないけど。まさかロッドテイルはこれを予測してこの話を……ないな。間違いなく。

・素兎の月、25日

試練その4。7階あたりで女の子の声が聞こえる。定期的に聞こえるから迷子つて可能性はあまり多くないが、放置しておくわけにもいかないから調査よろしく。……最近、本格的にグレイロッジの下請け機関化してないか俺たち。

で、カチドキにちと情報収集を頼んだ。だって7階なんて未熟な頃に調べまくつた階層なのに、俺たち一度もそんな経験してねーんだもん。つーかみんなホントにそんな不思議現象にぶち当たつてるのか？ マジで？

・素兎の月、26日

どうも11階から7階へ上がる階段があるらしい。

執政院には報告されてないらしく、ドーも一部のギルドが見つけたものの、自分の漁る場所を確保するために黙っていたらしい。なんだよ非協力的な奴らだなーとか憤慨してるカチドキは、たぶんもう13階で起こつたことを忘れてる。テメエもやろうとしたことあるだろが、独占。

で、早速調査、早速挫折。なんだよあのイバラだけで覆い尽くされた場所は……と言いつつも、イナー姉さんの発案でいくつか木を切り倒して普段の7階からそちらへと出るショートカットを作つておいた。やっぱ頭いいな、あのひと。

・素兎の月、27日

華の女王、アルルーナ。

結論から言えば、俺たちが追っていた声の主は、そんな名前のブツだった。

イバラの道の奥の奥。声に誘い出されそうになった俺たちは、イナー姉さんがぼん、と手を打ったことで我に返った。あのまま誘われてたら間違いなく死んでたな。

で、ちと搦め手ではあるが、カチドキひとりがおびき出された振りをしてふらふらと行き、そちらに敵の注目を集めておいて、俺たちが背後から急襲した。よくもだまぐらかしやがったなこのバケモノめ、くたばれ——そんなことを、戦闘前には思っていた。思っていたさ。

ははは、マジでシャレになってねえ。一応植物だけに熱には弱いみたいだが、相手も熱、氷、雷を普通に操ってきやがる。どれをガードしたらいいのかわからないコルネオリはもうどうしようもないとばかりにバツクガード連打、イナー姉さんがアザースステップでカチドキにソーマ連打させ、危ないときにはシヨロロJrまで回復に参加させる。事前に山ほど用意したソーマはみるみるうちに減っていき、雷撃が邪魔でうまく術を使えないシヨロロに頼るわけにもいかず、俺はずっとトルネード連打していた。やがてハマオが尽きソーマが尽きアマリタも尽きて、俺とイナー姉さんの体力が限界を迎えて技が使えなくなつて、もうダメ元で本気を出したイナー姉さんの矢が相手の額を直撃して、——それで、決着が着いた。

教訓：イナー姉さんは神。

つうかどこのバケモノだよ……と思っていたら、いきなり後ろからモリコに声をかけられてマジでびびった。モリコ曰く、こいつはずいぶん前に禁戒を犯してモリビトの集落を放逐された大犯罪者のなれの果てらしい。そういうのは頼むから自前で処理してくれと言ったら、処理しに来たら先を越されたんだつ、とすっげえ不機嫌そうに言われた。どうでもいいけど、こいつの機嫌がいいところを見たことがないな。

・素兎の月、28日

試練その5。

最近16階、もしくは17階で異様な環境の場所が発見された。それ自体は俺たちも知っていたし、相手が強くていい鍛錬場になるとマハに言われて何度か活用していたんだが、ぶつちやけその場の主を狩ってこいと。しよ……正気ですか？

で、久々に街でパベールに会ったのでその話をしたら、えらく驚かされた上に止められた。アレは状態異常攻撃が激しいからアシタというかメディックなしじゃ無理。つかアルケミストの術にも強いので悪いこと言わんからシヨロロを外してどつかその辺のメディック連れていけ。ハハハ、アンタそれ当のシヨロロの前で言いますか。案の定ぶち切れたヤツは、即座にシリカ商店とケフト施薬院を回って自専用の防具と大量のテリアカβを買い込んできやがった。さー行こうかアイノテ、まさか嫌とは言わないよね？ ……またこのパターンかよ。

で、突撃したが大量の熊やらワニやらに阻まれて撃退される。どこにいるんだよソイツは。

・虹竜の月、1日

昨日とおなじことをやり、やっぱり大量の竜に阻まれて撤退。くそ、勘弁してくれ。

・虹竜の月、2日

17階の魔物の名は、マンティコアと言うらしい。長い通路の奥の奥で待っていた奴は、俺たちを見ると尻尾で地面を叩いて挑発してみた。——上等。

で、シヨロロの新装備、ディノブレストが大活躍。ぶつちやけアレなしじゃアイツは尻尾+毒で一撃で気絶しちまう。耐えさえすればアルルーナのとときと同様にアザースステップ+ソーマで先制回復可能なので、あとはシヨロロがテリアカβを連打。アルルーナよりずっと楽でした。あいつ足が遅いから、後攻アイテムとしても使えるんだな……そりやそうか。第一、第二階層のシヨロロはアイテム以外

の何者でもなかったしな。

・虹竜の月、3日

試練その6。チ・フルルーがなくなった斧の代わりを求めているので、材料となる3階のゴーレムの腕をまるごと一本取ってこいって出来るかああ！

無理だと抗議したいところだが、ロッドテイル曰くもう引き受けて料金も受け取ったから、と言う。ははは、テメエその料金俺にもよこせ。と言ったら授業料だと返された。……だんだんムカついてきたぞ。

で、キャンセルだキャンセルと思ってハラヘルスの見舞いに来ていたチ・フルルーを捕まえて説明すると、ハラヘルスのほうが苦しそうに起きあがった。私が手伝う、つていやそれ無理だから！ と言ったのだが、ハラヘルスは

「現状、私はどうしても即戦力になれる体調ではないから、チ・フルルーとパペールにがんばってもらうしかないの。」

ね、だから私が行くよ」

と言つて、気丈に笑って見せた。

チ・フルルー曰く、ゴーレムの腕はまともに打ち倒したのでは壊れてしまう。だから、そうする前に一撃で相手を絶命させる技術が必要で、その技術をハラヘルスは誰よりもうまく使えると言う。

さらに、ゴーレムには実は二列に分かれた敵がいると後衛を無条件に狙う習性があるらしい。だから後列にコルネオリとカチドキを配置してコルネオリにガードさせておけば実はハラヘルスには危険はない。後は、ゴーレムまで無事にハラヘルスを連れていけるかどうかだけが勝負。

1回カマキリに捕まってヒヤヒヤしたが、なんとか無事にたどり着いて勝利。以前会ったときは比ベモノにならないくらい弱体化していたハラヘルスだが、それでもまだ腕は健在だ。

そしてシリカ商店で星砕きの戦斧が完成。チ・フルルーもまだ本調子ではないけれど、復活の日は遠くなさそうだ。

第四階層（3）：皆伝、決意、そして死闘

・虹竜の月、4日

ロッドテイルから免許皆伝をもらいました。すつげえ投げやりだったけど。要するに押しつけるネタが尽きたのと、いい加減やりすぎに気づいたんだろうな。……遅いわ。あー苦労した。

帰り際、マハから18階、19階、20階の地図をもらった。執政院のほうにもあるけど、たぶんいまは出してもらえないだろうから、という話だ。すげえありがたい。礼を言おうと、マハはちよつとためらってから、

「どう、勝てそう?」

と聞いてきた。

……不意打ちだったので答えは用意してなかったが、それでもなんとか——たぶん、と答えることができた。

マハはそっか、と笑って、

「がんばって。」

たぶんレンさんも、ホントはアイノテたちのこと、殺したいなんて思っていないだろうから」

と、告げた。

それで終わればよかったんだがワテナがいきなり近づいてきて、

「言うの忘れてた。あのさ、レンってうちらと戦ったときと戦法ぜんぜん変わってると思うよ。」

あいつもさー、ああ見えて意地っ張りじゃん? 構えも使わぬ素人に負けるなど自身の未熟としか思えんとか言っちゃって、負けを認めないんだよねー。往生際悪いっての。負けは負けじゃんねー」

……それを早く言ったださいワテナさん。ぶっちゃけいまの助言で戦闘プランが完膚なきまでに崩れ去ったんですけど。

まあいいさ。ともかく21階まで着くことが先決だ。幸いレンはモリビト達に知らせておいてくれると言っていたから、簡単に通れるだろ。

・虹竜の月、6日

畜生レンの奴、知らせておくってこういうことかよ！

18階に着いた途端、待っていたのはモリビトと思しき戦士たちの大群。それまで魔物なんてほとんど出てこなかった大平原は、途端に戦場と化した。

予想していなかった俺たちは大苦戦。回復のための水場を確保しつつ少しずつ大平原を探索し、なんとか正解と思しき通路を見つけるまでに1日かかった。街に帰れなかった……日付がずれているのはそういうわけだ。

で、野営しているところに相手の強力なカースメイカー部隊が奇襲。危なく呪い殺されるところだった……マンティコア戦で余ったテリアカβが、思わぬところで役に立った。

それでなんとか19階への通路を確保し、ついでに自分たちにしかわからないように秘密の出入り口を作って撤退。あー、マジで危なかった。

・虹竜の月、8日

今日も1日以上の仕事だった……

第四階層の樹海磁軸が、モリビトのテロによつておかしくなっちゃった。18階の大平原が妙なことになって、平原の中に小さな見えざる迷宮ができてしまったらしい。

とりあえず壁を経由していけば19階まで到達できる経路は確保したんだが、それだと回復の泉が使えない。その経路をがんばって探り当てようと思っていたら滅茶苦茶遠回りしなければならなくなつて、結局諦めかけたところでへんな木に突き当たっていきなり周囲の迷宮が消えた。なんだつたんだ……

そして撤退。くそ、一向に進めねえな。

・虹竜の月、10日

こここのところ、1日では帰れないのが定番になっている。樹海の奥

深くはそこまで遠いんだな……

19階の地図は渡されているので隠し通路とかはわかっているのだが、相手もそれに気づいて20階への階段のところで張ってやがる。仕方ないので奇襲するために迂回路を探っているうちに、俺たちはばったりツスキルと出くわした。

「……元氣そうね。よかった。

レンは、第五階層に登ってきた敵をあらかじめ駆除し終えたところ。いまならいつ行っても21階にいると思う」

と言われた。やっぱり超人なんだなアイツは……いや、目の前にいるコイツも同類だが。ぶつちやけ、カチノへなんかとは気配の質が違う。あつちはうさんくさい山師としか思えないが、こっちは目にしただけで死と疫病を連想させる呪い師だ。

思っていると、ツスキルは言葉を続けた。

「レンは——亡霊に縛られている。

悔しいけれど私にはどうにもできない。私は縛ることや呪うこと、傷つけることはできるけれど、それを解除することができないから。

だから、お願いします。彼女と私を、倒して欲しい」

そう言って、彼女は俺たちに背を向けた。

去りゆく背中に、おい、なんでおまえはレンに協力するんだ？ と尋ねる。答えは期待していなかったが、彼女は少しだけ立ち止まって振り向いた。

「いまレンの側を離れたら、レンは見捨てられたと思うってしまうだろうから。

ごめんなさい。レンが戦う限り、私も戦う。それだけは変えられないの」

そしてそんなことを喋っているうちに、俺たちはモリビト達に囲まれていた。

かろうじて血路を開いて撤退。外に出たらもう夜が明けていた……なんてこつたい。

イナー姉さんに導かれて隠れつつやってきた20階。ようやく降りてきた俺たちを待ちかまえていたのは、あのモリコだった。

「アルルーナのときは知らなかった。おまえたち、25階よりさらに下を目指すつもりらしいな。」

悪いがそれはさせない。古くからの盟約に従い、私はおまえたちを排除しなければいけない」

盟約ってなんだよ、誰との盟約だ、と聞くと、ヴィズル殿とのだ、という答えが返ってきた。……死人じゃねーか。そんなのに義理立てしてどうする気だ、と言うと、モリコは初めて見る、悲しそうな表情をした。

「千年だ。千年間もずっと、我らはその死人たちに義理立てして生きてきたんだよ。」

いまさら変えられない。樹海の謎を暴こうとする者は、ここで排除させてもらう」

ぱちん、と指を鳴らした途端、とんでもない気配が山ほど、近づいてくるのがわかった。

樹海は視界が悪いので集団戦に向いた地形ではない。

だから樹海で戦争をしようと思えば、広域に展開して、敵を見つけ次第急激に戦力を集積するやり方しかない。

グレイロツジはそれらの敵を集積させるに任せつつ、正面から撃破したと聞く。長期戦になったが、彼らは勝った。

ロックエツジは、持ち前の高火力であつという間に敵を屠るやり方で、一気に各個撃破したらしい。アシタらしい戦法だと思う。

俺たちは、それら2ギルドのどれとも違う。どちらの戦法も、英雄たちだからこそできた戦法だ。だが俺たちは英雄じゃない。

だから、——イナー姉さんのとつておきの秘策、名付けて超ヒット&アウェイ作戦に頼るしかなかった。要するに、敵を19階への階段寸前まで引きつけて速攻撃破し、即座に19階まで退避してまた戻る。体力が尽きたら18階まで撤退して回復し、これを繰り返す。きわどい場面もあったが、かろうじてすべてを撃退し、地図に記された21階への階段へ向かう。

モリコはそこで待っていた。モリビトの守護者、偉大な黄金の鳥イワオロペネレプと共に。

「これが最後だ。モリビトの意地、最後の戦力を抜けられるのか——試してみるがいい！」

宣言するモリコ。高らかに鳥が鳴き、そして最後の戦いが始まった。

苦戦はしなかった、と思う。実力的にはたしかに押されて然るべき相手だが、相次ぐグレイロツジの難題を解決してきた俺たちは、連携能力が格段に上がっていた。——そう、個人で勝てないなら集団で。冒険者の基本だ。

最後、コルネオリのシールドによって地面に打ち倒され、弱々しく鳴いて動かなくなったイワオロペネレプを見て、モリコが泣き出した。ちくしよう、なんで人間なんかには勝てないんだ、と言って。

……いや、そんなの当たり前だろ。おまえだって気づいていないわけじゃねえだろう。俺たちは戦う理由と覚悟があつて——おまえたちは、もうぶつちやけ、戦いたくないんだろ。

そんなこと、と叫んだモリコがそこで絶句する。当然だ。こいつだって——誰にだってわかる。長く続いた戦争で、モリビト達はもうボロボロだった。

俺たちには作戦があつたし知識があつた。だがそれを差し引いても、傷だらけで動きが鈍いフォレストオウガや、喉をやられて火が吹けないフォレストデモン、ろくに動けないイワオロペネレプは俺たちにとって難敵とは言えなかった。彼らがもしグレイロツジがここを抜ける前の戦力を保持していたら、俺たちは勝利できたかどうか。

もうやめろよ。これ以上戦ってもおまえ達はさらに傷つくだけだ。そんなことをして、千年も生きてきた歴史を踏みにじって滅びるのは馬鹿みたいだろ。そろそろ——潮時じゃないのか。

だがモリコは泣きながら叫ぶ。うるさい人間、樹海は私たちのものだ、おまえたちなんて千年も前に私たちを生むだけ生んでおいてさっさと上に逃げたくせに、ヴィズル殿を千年も放っておいて勝手に繁殖した奴らが戻ってきたら我が物顔で闊歩してるんじゃない吐き気が

するっ。

……そんなの知らねーよ俺は。知ってるのは、おまえたちがなにかわからないもののために戦っていて、このままじゃなんだかわからないまま全滅する。それだけだ。

なあ、おまえたちももうたくさんだつて思ってるだろう？ と周囲に呼びかける。顔を上げたモリコが見たのは——ずらつと周囲に勢揃いした、傷だらけのモリビト達だった。

男も女も、子供以外は傷のないやつなんていなかった。すげえな、こいつらみんな勇敢な戦士だった。楽勝できた奴なんてひとりもない。

でも、もういいじゃないか。おまえたちは千年がんばってなにかのために尽くしたんだろう。もうそろそろ——次に行こうぜ。なあモリコ。そう言うとな彼女はモリコつて言うな、と言って、……初めて少しだけ、笑顔を見せた。

知ったかぶつて高説垂れ流して、俺もいい気なもんだね……と思っただが、この際目をつぶりたい。目をつぶってみんなが幸せになるなら、それでいいじゃねえか。

ああもう、それにしても疲れた。なにしろこつちだつて傷だらけだ。コルネオリだけはピンピンしているが、あいつは身体が超合金で出来てるからな……そしてその相手をするのは俺。勘弁してくれ。こらカチドキ逃げるな。

第五階層（1）：青と白

・虹竜の月、13日

モリビト達を下した翌日。俺たちは、モリコの案内で21階へ降りる階段へと来ていた。

「ここを降りればシンジユクのトチョウとかいう名前の遺跡の中に出る。」

第六階層の敵はレン殿に押されてまだそちらまで来ていないようだが——時間はあまりないと思う。だから急げ」

という。ぶっちゃけ、ここまで協力的になるとは思わなかった。けどなぜシヨロロとだけ目を合わせようとしなないんだろう。シヨロロのほうもすげえ険悪な目でいらんでる。仲良くしろよなおまえら、とひとごとっぽく言ったらふたりからぶん殴られた。……な、なぜ？

そして樹海磁軸に到達、撤退。休みたいところだがそうはいかないだろう。ふたまたに分かれた不思議な遺跡の中で、レンとツスクルが待っている。

・虹竜の月、14日

ふたまたに分かれたビルとビルをつなぐ、水晶で出来た木みたいな橋の上。そこで、レンとツスクルが待っていた。

戦うことが決まっている以上言葉を交わす必要はない、とレンは言ったが、それだどこっちは気になって集中できない。改めて、なんで俺たちと戦う、またどうしてグレイロツジやロツクエツジと戦ったんだ、と尋ねた。

「——グレイロツジから聞いたのか。」

そうだな。初めは、私の主からの命令だった」

レンは、ぽつぽつと語り出した。執政院の長ヴィズルの奸計。樹海が人を呼び寄せて街が栄える以上、街のために樹海の謎は決して解けてはいけないのだと——そう考えたヴィズルは、モリビトとグレイロツジを共にけしかけて争わせ傷つけさせ、それでもグレイロツジが止まらないとわかると、今度はレンとツスクルに奴らの撃退を命じ

た。

だがふたりは負けた。負けただけじゃない。その後、身体を張って止めようとしたヴィズルもまた、共同戦線を張ったグレイロツジとロックエツジの前に命を散らすことになった。

「主には大恩ある身。私は全力で彼らを打ち倒す義務があつた。

しかしそれは果たせなかつた。それで疑問に思つたのさ。これは正しい結末なのか、それとも私の未熟故に間違いが起こつたのか、とね」

そうして、レンは迷いはじめた。

迷いながらも、レンは続けて降りてきたロックエツジを迎え撃ち、——迷い故に、ふたたび膝を折る。二度目の敗北は、はつきりと自分の実力ではないと悟つた彼女は、せめて正しい結末に至るために自分になにが必要であつたのかが知りたいと……それを求めて、ずっと樹海をさまよつていた。

そこに、ヴィズルが復活したという報告が入る。

ならば、我が使命は今度こそ果たすべきもの。

グレイロツジ、ロックエツジの精鋭には通じずとも、それ以外のなんびとたりともヴィズルの元には行かせない。今度こそ——迷いなく、そうしようと願つた。

「それだけのことさ。

地下に現れたというヴィズルがなんなのかはわからない。オバケ、亡霊なのかもしれないし、なりすましかもしれない。

そう、そんなのはどうでもいいんだ。私は私として、ヴィズルのために命を果たす。後は余分だ」

そう言つてレンは刀を抜いて——迷いなく、こちらへと向けた。

「勝負だ。ホイスビーの諸君。……氷のレン、参る」

言つた直後に先制したのはイナー姉さんの矢。迷うことなくツスクルの肩に突き刺さり——集積ペイントレード、というツスクルの声と共に、どすどすどすとイナー姉さんの身体に矢傷が現れて血が吹き出て倒れて動かなくなつた。瞬殺。

それを視界の片隅に入れつつ、俺は矢のような速度でカチドキに向

けて走るレンに横から斬りつける。一合。二合。ちくしよやっぱ三合が限界か。剣を飛ばされそうになった俺の横からコルネオリが盾を構えて突撃し、ふたたび前のように盾の内側へとあっさり入られ——そして、どす、とそのレンの肩に、矢が突き刺さった。カチドキ。楽器を捨ててまで攻撃を優先したのか。一瞬ひるんだ隙にコルネオリが態勢を立て直してシールドスマイト。レンは飛んだ。飛んで橋から落ち——と思ったら、側面のでかい水晶の柱に足をかけてさらに飛び、一気に俺に斬りかかる。フォローしようとしたカチドキの首にツスクルの手から出たツタがからまり、カチドキが血を吐いて倒れた。

詰み。そう、俺たちがどれだけうまくやってもこれで詰みだ。——前は震えているだけだった、つまりは手の内を一回も晒していないヤツがいなければ。

飛びかかるレンに向けて炎が走る。その火を受けてさらにチェイス。対抗するレンは——畜生、空中で抜刀氷雪かよ！　がきりと剣が交錯し、その隙に俺の胸を足場にしてレンが後ろへ跳躍。だがそこにコルネオリが突進！　さすがに態勢を崩されたレンはそれでもコルネオリを押し返したが、ツスクルに向けて走る俺を止めることは、できなかった。

峰打ち一閃。ペイントレードで返すこともできずに倒れたツスクルを背に、俺はレンに言った。もうあんた一人だ。降参しろ。レンは、初めて意表を突かれたような表情をした。君、それは本気で言ってるのかい。だってほら、さっきまでは2対5でノルマ2・5人。いまは1対3でノルマ3人。な、ちよつと増えただけじゃないか。真顔で言い放ったレンは、初めて見る不思議な構えを見せた。

「八相の構え、と名付けた。もつとも名前にはあまり意味がないんだ。構えとは技術の体系を指す言葉。私ぐらいにしか使えないモノを構えと名付けても、あまり意味はないだろう？」

ククク、と鬼神のように彼女は笑い、そして——悪鬼羅刹も裸足で逃げ出す、剣の暴風が始まった。

いやもう、ホントになんにもできねー。一応シールドを構えてじつ

としていればなんとかなるんだが動こうとすれば即死級の剣舞が飛んでくる。シヨロロだつて術式の間合いに入ろうもんなら即殺されかねないんで怖くて入れない。コルネオリと共に亀みたいに固まったらシールドに名前刻まれた。畜生、遊んでやがる。

最後はそれでも、シールドに身を隠したまま橋の端に押しつけるように追いつめたコルネオリから逃れようとふたたび飛び上がったレンを、先読みしていた俺がシヨロロの大雷嵐の術式を乗せたチエイス剣で迎撃して吹っ飛ばし、降りた先をまたコルネオリがシールドで叩き据えて辛うじて勝った。マジでこいつとは二度と戦いたくねえ。

「……なんで殺さない？」

ぜんぶ終わった後、息を乱して倒れているレンが言った。

「私たちは本気でおまえたちを殺そうとしていた。たぶん他の連中が来てもそうだ。」

アイノテ、熟練の冒険者である君らしからぬ落ち度だ。復活して再び剣を向けるかもしれない相手に慈悲は要らん。とどめを刺せ」

言つて目を閉じる。

つたつてなあ。グレイロツジだつてべつにあんたを殺しはしなかつただろ。そう言つたらおまえたちはグレイロツジの出先機関かと笑われた。う、そ、それは痛いところを……じゃなくて。

俺が言いたいのは、奴らと同じつてこと。ぶつちやけ、レンとはもう戦いたくない。そして俺は、レンはきちんと正気に返れば戦わないで済むと思つてる。

「正気。」

私が狂気だと言うか、若造」

ああ、シラフにや見えねえ。だつてアンタ——結局もう、戦う理由なんてないじゃねえか。

レンは唇を噛んで、返事をしなかった。

だから俺は続けた。モリビトだつてそうだ。もういい加減やめとけよ。アンタは俺たちに向けて潮時だつて言つたが、実はアンタ、あれ自分に向けて言つてただらう？

「違う。あれは私なりの慈悲だ。」

ずっと君たちを見てきたから、これ以上進まれて、自分たちの手で殺すのが嫌だったんだ」

そう、ロックエツジの時も思っていたんだらう？

「……………」

はは、そうか。そうだったな」

未熟故に負けたんじゃない。アンタは自分の気持ちに負けたんだらう。

なあ、レン——結局今回も、迷いが出て負けただろ。その迷い、アンタがあのととき俺たちを殺さなかつた理由そのものじゃないのか。アンタはもう誰も殺したくなんかなくて、身体が拒否してるんじゃないか。

「——黙れ。」

私はいま、とても混乱している。これ以上言ってくれるな」

じゃあ約束だ。頭が冷えたら、金鹿の酒場に来て飲もうぜ。そのときに、返事を聞かせてくれ。

「…………約束しよう。」

いまは、行け。ホイスビーの諸君。君たちはもう、我々が止められるレベルの冒険者ではなくなった」

結局、その日彼女は酒場には来なかった。

……たぶん、もう少し時間がかかるんだらう。

それでも。

いつかまた、アイツはアイツらしい姿で俺たちの前に現れるだらうと思う。

それまで、しばしの休息を。超人だって休みは必要なのだ。

そしてこの名前入りシールドどうしよう。正直構えていると恥ずかしいんだが売り払うのも忍びないし。

第五階層（2）：休養、深層、そして馬鹿

・虹竜の月、15日

イナー姉さんとカチドキが少しの間、休養することになった。

まあ、かなり致命的な打撃受けてたし。ネクターだったってアレは基本的に気付け薬。ああいう具体的損傷には、天下のケフト施薬院もなかなか対処できません。一応カチドキのほうは立って歩ける状態ではあるんだが、喉がアレなので水を飲むのも一苦勞。しばらくは絶食しなきゃいけないということで、とりあえず動ける状態じゃなさそうだ。

で、レンは来なかったが、今日はツスクールが酒場に現れた。

「うまくやつてくれたみたいね。ありがとう」

という彼女曰く、ツスクールが意識を取り戻すとレンはひとりで支度を始めて、ちと自分を見直してくるからその間のことは頼む、と言い残してどこかへ行ってしまうらしい。……勝手だなオイ。そう言ったら彼女は笑って、

「そうね。でもそれはいいことだから。」

私はレンの友人だから、レンが必要とするときだけ近くにいてあげればいいの。彼女が要らないと言ったときまで、べたべたする必要もないわ」

と、達観したように言った。

それで、いろいろわからなかったところを聞いたんだが、結局ツスクールもあんまり詳しく事情を知っているわけではないらしい。

わかったのは、ヴィズルという例の人物はただの執政院の長だったわけではなく、たぶんグレイロツジを襲った理由も表向きの理由とは違うわけがあったんじゃないか、ということだった。……なんだかわからん理由で殺し合いを命じる人間か。友達になりたくないタイプだな、と言ったら、ツスクールは深くうなずいた。

「うん。でもレンにとっては恩義あるひとだったから。」

私は彼に関わるべきではないと思っていたし、だからこの迷宮はさっさと踏破されてしまえばいいと思っていた。そうすればレンも

ヴィズルとはもう関わらないで済むと。それでグレイロツジを誘導して、迷宮の奥へ案内したこともあったわ」

だからこそ、ヴィズルから信用されなかった彼女には、大きな秘密は手に入れられなかった。レンはまた違うことを知っているのかもしれないけれど。

「いずれ、レンはまたあなたたちの前に姿を現すと思う。

そのときに、いろいろ聞くといい。私は——私にとっては、これはもう終わった話だから」

そう言つて笑う彼女の顔色は、いつもより心なしかいいような気がした。

そしてイナー姉さんが部屋を訪れたパベールからいろいろ聞き出してた。なんでも一撃で相手を倒す攻撃力がどうか。急に勉強熱心になったな。まあ、そうでないと痛い目に会うということを思い知ったからなんだろうけど。

しかしあの2人が並ぶと、なんというか……顔だけはベテランのイナー姉さんと、童顔＋女顔でどこか頼りないパベール。なんだか力関係と外見が奇麗に逆方向向いているあたりが見ていて愉快すぎる。次にパベールに会ったときに、うっかり笑い出さないように注意しよう。

・虹竜の月、16日

最近、マハとようやく互角に近い戦いができるようになってきたので、調子に乗つてその場にいたチ・フルルーと稽古。手も足もでねえ……あの斧、盾で受けるだけでじーんとなって動けなくなるんだが。それを暴風のように連打されると俺にはもうどうしようもない。

で、それを後ろから見ていたシヨロロにケラケラ笑われた。テメエ文句あるなら自分で戦つてみると言つたら、

「へえ、じゃタッグ戦でもやる？　ボクとアイノテで組んで」

とか抜かしやがった。チ・フルルーもそれを聞いてちよつと考え込んで

「アシタさんがいれば……」

マテ。つーかタツグ戦で片方メディックありつて詰みとか言いませんか。アシタが後列に下がって医術防御しているだけで普通に勝てる気がしねえ。そう言ったのだが、

「え、そんなことないですよ。ほらコルネオリさんと組めば普通にアリじゃないですか」

あーなるほど。たしかに防御陣形組んでフロントガード連打してたらトルネードでアシタを削れる分俺たちのほうが若干有利か。そう言ったら今度はシヨロロがにやりと笑って、

「えー、でもボクがアシタさんと組んだら勝ち目なくない？ それ」

馬鹿野郎。そしたら俺はパペールと組んでアザースステップトルネードで一気に狩るわい。そう言ったら不満そうにしながらもシヨロロは反論しなかった。……まあ、それこそ詰みだしな。

しかしこう考えていくと、なかなかコンビで最強の組み合わせってのも見つからないもんだな。コルネオリとアシタが組めば俺たちには手も足も出ないが、今度は攻撃力不足が原因でハラヘルスとカチノへのコンビに勝てなくなりそうだ。でもハラヘルスとカチノへじやチ・フルルーとワテナの組には勝てないだろうし……ダメだ。決め手が見当たらない。案外ナリアンテスとカチドキとか悪くなさそうだけど。ドレインバイト＋奇想曲の組み合わせは案外えげつない。

そしてそんな雑談に明け暮れているうちに日が暮れた。つーかフルメンバー揃わないとうちもロックエッジも動きようがねえな。

・虹竜の月、17日

動きよう、ありません。

よく考えたらアクティブメンバーって俺たち3名＋ロックエッジ2名でちょうど5名、迷宮で自由に動ける最適人数じゃん！ ということに気がついた。というわけでチ・フルルーとパペールがうちに参戦、いきなり第五階層を飛び越して第六階層を垣間見ることになった。

で、ロックエッジが現在苦戦中の27階へゴー。ご、ゴー……なんじゃこりやー！

がそもそも君ら外見で区別が付きません。そう言ったら長男が笑いながら、

「うん、俺も次男と四男の区別はつかん」

……それ以外は付くのかよ。信じられねー。

・虹竜の月、19日

カチドキが、カチドキRになって戻ってきた。

なんでも13階でイケニ5兄弟と共に泉の精霊と名乗る酔狂なモリビトと出会ったそう。どうもバードが大好きらしいそのモリビト（通称：ピンコ。いま決めた）は、6人もバードが現れたことにいたく感激したらしい。このなかでいちばん私を楽しませたバードに素晴らしい加護を与えましょう、とか言われてイケニ5兄弟は即座に芸大会を開いて競い合い+けなし合いの骨肉の争いモードに入ったが、カチドキは自称ジャーナリストなのでビールと落花生片手にピンコと雑談しながらそれを見ていたらしい。……常備してるのかよテメエ。酒飲みめ。

で、結果として兄弟は全員疲れ果てて自滅。すっかりピンコとお友達モードになったカチドキがなし崩し的に加護を受け取ることになった。なんでも、名前をカチドキからカチドキRに変えることで風水の加護を得てパワーアップ、って話だが……効果あるのか、それ。ちなみに例のネズミは今日、俺たちが26階をさまよっているうちに偶然発見。……どこまで潜ってるんだおまえは。竜に踏みつぶされるぞ。

・虹竜の月、20日

イナー姉さん、退院。

まだ傷は癒えきっていないし明らかに無理してるんだが、自分は前線の主力じゃないから完調でなくても大丈夫、という。

ちょうど27階も手詰まり感があつたし、パペールとチ・フルルーにはふたたび調整生活に戻ってもらって、俺たちは無難に21階から下へ行くことにした。なにしろ最近24階のほうでもトラブルが

起こっている気配があるそうだし、そもそもあのあたりでまともに動けるギルドはグレイロツジとロツクエツジとうちしかいない。絶対に人手が足りてないのだ。

で、探索してみたらいきなり詰まった。グレイロツジの活躍によって動き出したはずの昇降機が、なぜか動かなくなっていた。しかも箱の中からはカサカサ、カサカサというとても嫌な音。む、虫は苦手だ……とか言ったらシヨロロに馬鹿にされた。なんとでも言え。嫌なモノは嫌なんだよ。

そういうわけでもずは後回しにして周囲を探索。しかし改めて思うが、こんな足場でよく俺たち戦えたなー。足踏み外したらまず生きてねえよこれ。

・虹竜の月、21日

最近、シヨロロが絶好調。

大雷嵐の術式連打しているだけで敵が勝手に潰れていく。こっちの財布もどんどん潰れていく。

勘弁してくれ。アムリタは有限なんだぞ、と言ったら、じゃあ先に24階の泉を確保しようよと提案された。よしそれで行こう、と調子に乗って遠出して破滅の花びらに先制されて全滅しかけて泣きながら撤退。こういうの、最近は久々だな……

・虹竜の月、22日

アーマービーストが堅すぎてめげそう。

なんだアレ。勘弁してくれ……時々シヨロロの大爆炎の術式をかくぐって生き残る個体が出て、それを処理させられるときの苦労と言ったらもう。そしてぼやっとしてしていると熊とかワニとか竜とか襲ってくるし。なんだこの階層、と言いつつふと気づいたんだが、そういうばここつてすごい深層なんだよな。やばい、この前まで第六階層にいたせいで変な錯覚してる？

・虹竜の月、23日

最悪。

昇降機をどうにかする方法として、とりあえずグレイロツジが昇降機を動かしたときのやり方を真似てみようとかチドキ（Rとか面倒だから省略）が言い出した。

まあ結局俺たちも昇降機なしで25階に降りる手段は見つけられなかったわけで。窓から飛び降りる、という手も考えたが、下になんかわからない水晶の破片やらなにやらがトゲみたいに乱立している危険な状態なので、できれば遠慮したい。

そうして俺たちはその機械室に入った。こういうところではシヨロ口の独壇場になる。いろいろ調べているのをぼーっと見ていた俺たちだったが、暇になったコルネオリが壁際によりかかったところ、ぼち、という凄惨な予感のする音がした。

ぎー、がしやんがしやんがしやん。そんな音がして、部屋の正面パネルの中央に悪趣味なドクロ印付きのスイッチが飛び出てくる。明らかにナニカのセーフティを解除したっぽい。そうは思ったものの、最後のボタンが押されてなかったために、そのときまだ俺たちはさほど警戒していなかった。なんだよこれー。バカ変なものに手を出すな。知ってるよこれハドウホウとかそういうのの発射装置だよきつと。なんだそりや、テキトー言って押して変なことが起こっても知らねーぞシヨロ口。おいカチドキ、テメエなに押そうとしてやがる。

——冗談で押すふりをしたカチドキが、地面のなんでもない箇所につつまづいた。

神速でコルネオリが飛び込む。それはよかったんだが盾でがつんとぶつ飛ばしたのがいけなかった。アオリを食ってシヨロ口がコンパネ側にのけぞってひっくり返りそうになり、それを支えようとした俺は、急だったのでバランスが取れずに一緒にひっくりこけた。ぼち。なんだいまの音。ハハハそんなの決まってるじゃん背中がボタンを押した音さー。

上部スクリーン点灯。鮮明に映った地底の遺跡のなかで、外の洞穴に向けて光の帯が突き刺さるのがはつきりと見えた。次いで爆音。さらには、なにかバイ獣がきしやあああああ、と怒り狂う音。ヤベ、

本格的にマズいモノを直撃しちまった！ ちくしょうハドウホウめ
どうせなら一撃でぶつ倒せば害もないものを。

後でパペールから聞いたところ、雷鳴と共に現れる者、とかいう
ごつつい名前の竜が25階に居着いちゃったらしい。あーあ。俺知
らね。こらかチドキ、テメエなにを共犯者面してやがる。同類だと思
われたくないからあっち行けあっち。

第五階層（3）：始末、復活、そして呪い

・虹竜の月、24日

執政院からミツシヨン発動。25階の様子を見てこい、だそそうな。要するに責任は自分たちで取れと。はいはいたしかに俺たちのせいですよ。おのれ。

で、ともかく昇降機が動かないと話にならないってんで、こりやもう突撃しかないかーとばかりに行ってみて死にかけて。虫くらい閉鎖空間に大爆炎ぶちかませば死ぬだろとか思ってたら相手めちやくちや早くてあつという間に這い出てきやがって、しかもタフだからなかなか死なない。そして糸がどンドン絡まる。シヨロ口の術式が無力化されたタイミングでギリギリ俺が動けるようになったのと、防衛陣形が崩れた頃にちょうどコルネオリが盾突撃可能な態勢を整えたおかげでなんとか勝てたが、もう少し遅かったら終わってたな。

で、虫掃除を済ませて、ケーブルの点検も終えてなんとか25階への道を確認。あー疲れた。

・虹竜の月、25日

25階はゾウみたいな超でかい魔獣がうろろしている本物の魔窟だ。そのくせ、小物もえらく大量に出るので始末が悪い。グレイロツジが先だつて隠し通路を見つけてくれていたんだが、その隠し通路の着く先には竜がいらっしやる。仕方ないので地道に行くしかないさそうだ。ガツテム。

で、動いていたら遺跡の外の地面に変な鉄のでかい箱発見。シヨロ口曰く、古代の乗り合い馬車の類と考えられているらしい。マジかよ。あんな箱のどこに馬をくくりつけるんだ？

・虹竜の月、26日

アシタ、電☆撃☆復☆活☆

なんでも右腕が動かなくなつたからつすっぱり切断した上でシヨロ口父に相談して錬金術式の義腕を装着したらしい。その決断

の早さにもびっくりだがアシタの真価はそこから先。右腕動けば後はどうでもいいとばかりにさっそく現役復帰を宣言し、パペールの止めるのも聞かずに俺たちのところにやってきて

「というわけで復帰戦はあのナマイキそうな雷竜にするから。キミたちサポートよろしくー」

無茶言うな。つーかなんで俺たち？ と聞いたら、だつてロツクエツジっていまパラディンいないんだもん、と言う。医術防御あれば強いパーティでガチ戦闘してもなんとかなるかもしれないけど、いまの体調じゃ無理だしエリアキュアって実はあたし苦手なんだよねーアハハ。だからコルネオリのシヨックガードちようだい。ついでだから残りも一緒に来なさいこれ決定事項ね。すげー。あまりの横暴さにシヨロロがぶち切れたが、アシタはどこ吹く風でじゃあキミは来なくていいよ。でもコルネオリは当然来るよね？ ハハハ忘れてた、あいつ狂信者でしたねそういえば。そうして当然のようにコルネオリを味方につけたアシタはなぜか俺に向かつて、

「それじゃ明日の5時に樹海磁軸26階集合ね。遅れたら死刑」

と言いつ放つて去つていった。……オイ、なんで俺は参加確定してるんだ？

・虹竜の月、27日

雷竜轟沈。やったネ！ マジかよ。

いやもう、アザースステップ+医術防御がいかにより得ない強化スキルかということを感じ知った一戦だった。たまに強烈な一撃が飛んでくるんだが効きやしねえ。肝心の棍棒はアシタの腕のほうの調整不足でいまいち揮わなかったが、その辺は俺たちでどうとでもなる。シヨロロがいないのでチェイス剣こそ使えないがそこはそれ、トルネードでがりがり削つて長期戦を制し勝利。最後アムリタによるドーピングに多少頼ったとはいえ、余裕でした。

で、勝利を祝つて酒場で宴会。アシタのヤツは酒が入ってもそのまんまで、要するにアイツはシラフでも酒が入つてると大差ないようなヤツなのだ。カチドキの同類か。最近そんな人間ばっかりだ。

とはいえ、アシタの傷は本当に完治してはいなかった。そりやそうだ、あそこまでぶつ壊れたら人間元通りなんてなれねえよ。現に、彼女の衣装の肩口から見える肌には、生々しい傷痕がはつきり残っている。見入っていたらアシタはちらちらそれを見せて、ホラホラせくしーだろ惚れるなよとか言っつけてきやがった。——まあ、こいつはこういうヤツだ。

それで、最初のバカ騒ぎが幾分落ち着いたあたりで、俺はさっさと早引けして宿舎へ戻り、……もうひとりの、困ったちゃんをフオローしておくことにした。

案の定、シヨロロはものすごく怒っていた。アイノテのバカ、みんなさっさとロックエッジでもなんでも行っちゃえばいいんだ、みたいなことを言っつて部屋に入れようともしなかった。

で、しようがないから俺は、部屋の扉ごしにアシタの真意（と、俺が思っていること）を聞かせることにした。

——そもそもこの一戦、本来はホイスビーが引き受けなければいけないものだった。

偶然の産物とはいえ、俺たちがやってしまったことだ。俺たちでけじめを付けることができなければ、メンツは丸つぶれ、信頼は激減する。たぶんギルドの通常営業も難しくなって、解散までは行かなくとも、深層を潜ることは諦めざるを得なくなるかもしれない。

とはいえ、ホイスビーの現戦力で雷竜を倒すことはまずできない。だからアシタは、いろいろ理由を付けて手伝ってくれたのだ。ロックエッジの仲間でなく、俺たちを連れていったのはそのせい。弱点属性の見えない雷竜にはチェイス剣使いの俺よりスタンバッシュ屋のチ・フルルーのほうが確実に使えるし、イナー姉さんと違ってパベールは戦闘も強い。パラディンが欲しければグレイロツジに掛け合つてマハを連れていけばいいし、バードだつてロックエッジにはチクタクというそこそこ使えるのがある。俺たちを巻き込んだのは、なんのことはない、俺たちを巻き込むこと自体が目的だったからだ。

シヨロロは返事をしなかった。まあ、しばらくは感情的に納得できないかもしれないさ。だから俺は、それ以上のことは特に言わず、早

く寝ろよとだけ告げて自分の寝床に帰った。

さあ、明日からまた普通の探索に戻らないと。いろいろ遠回りしたが本来の目的はロックエッジを壊滅させたヴィズルの幽霊？とかいうヤツについて調べること。かつての決戦の地、25階を調べれば、その手がかりはきつとあるはずだ。

・虹竜の月、28日

案の定機嫌を直したシヨロロも加わり、いよいよ25階を本格探索開始。

25階、広いなー。まがりくねった通路が多くてとても辛い。唯一の救いは熊が追いかけてきたとき。あいつ防陣形仕掛けるとほとんどなにも怖い行動をしてくないから、その間にカチドキの唄で体力回復させながらぼーつとできる。癒しの時間だ。

そんなことをやっているうちに一応俺たちも回れるだけの箇所は回った感じがする。後は雷竜がいた場所の後ろとかその辺を残すのみ。

・白蛇の月、1日

参った。マジで身体が重い。

正直ペンを持つのも辛いのだが、日課をこなさないと気持ち悪くてしょうがないので寝る前に必要なことだけ書いておく。

雷竜のいた場所から、26階への階段をスルーしてさらに後ろに回った場所。そこに、ソイツがいた。

世界樹の王、ヴィズル。かつてそんな名で呼ばれたその男は、壊れた機械みたいに、秘密を暴いた者に死を、と繰り返すだけの人形と化していた。

で、そんな状態にも関わらず、ソイツの壊れた意志に世界樹が反応した。反応して、かつてのグレイロッジに対するように、暴れ出した。

とんでもないパワーだった。まず王の威厳、と呼ばれる強力な威圧攻撃によって、俺たちはすぐ陣形を崩され、またカチドキの唄も効力を失ってしまう。そして態勢を崩したところに、世界樹の根が大嵐の

ごとくうねり狂う。後でマハに聞いたら、サイクロンルーツ、とか名付けられた技術らしいがともかくとんでもなく強力で、防いでも防いでも削られ、ソーマがあつという間に尽きていった。

——勝てたのは、たぶん。相手が壊れていたからだと思う。何度目かの攻撃の直後、世界樹の動きがにわかにおかしくなった。エラー発生、自己修復機能を作動させます。そう言つて守りに入ったソイツは、カチドキの曲によつてさらに機能を阻害され、ただ伸ばした枝でこちらの剣を払うだけの防御形態に入ってしまった。

そうなるともう、シヨロ口と俺の独壇場だ。伸ばした枝など、炎の前には無力でしかない。世界樹は焼かれ、裂かれ、人形のような男を手放して三度、眠りについた。

だが、俺たちは相手を甘く見ていた。

落ちた男の様子を見ようとしたその瞬間、男の身体から禍々しい光が放たれた。

瞬間、周囲にとんでもない呪いの波動が走り、近くにいた俺とコルネオリとシヨロ口 Jr はまともに受けちまった。おかげで身体がとんでもなく重くなり、歩くこともままならない惨状になった。

ちなみに、怖がつて近づかなかったイナー姉さんと、そしてカチドキは無事。つーかなんでカチドキは無事なんだ。……風水パワー？まさかな。

そして肝心なことにはなにもわからない。というかアレ、マジでなんのために襲ってきたんだ？

第六階層（1）：リハビリ、訓練、そして血戦

・白蛇の月、2日

かつてロックエッジが壊滅したとき、グレイロッジは第六階層を探索しており、残りのギルドは第四階層に到達するのにも苦勞する有様だった。当然、第五階層は完全に人の手を離れ、そのせいでシリカ商店の在庫はすっからかん。施薬院共々、やりくりにはとても苦勞していた。

俺たちが第五階層に行くようになってからその状態は劇的に（主にイナー姉さんの採集能力のおかげで）改善したのだが、それもつかの間の夢。ロックエッジはまだ本調子でなく、グレイロッジは相変わらず深層に苦戦中。そして俺たちがこの通りとあつては、また相当やりくりに苦勞することになるだろう。

そんな状況なのに、シリカ商店の店主が差し入れとか言つてアーチドロワーというごつい弓をふたつもよこしてきた。いま無事なのがイナー姉さんとカチドキしかいない俺たちにはとても助かる差し入れだが、同時に期待もひしひしと感じる。——呪いの影響でまだ満足に動けない身としては、どうにも歯がゆい。

で、見舞いに来たマハとまた雑談。ヴィズルの話を振つてみたら、彼女は前と違つて知つていることを全部話してくれた。もうアイノテたちにも関係のない話じゃないもんね、と言つて。

前の執政院の長、ヴィズル。その正体は、かつて汚れた世界を浄化して危機から人類を救うために行われた世界樹計画の、その唯一の見届け人だった。

その計画がなんだつたのか、どの程度それらが進んでいたのか、そして——根本的に、それを知つた人間がなぜ殺されなければならなかつたのか。全部わからない。レン達は街の発展のためと聞かされていたそうだが、千年も前から生きている人間がいまさらその程度のこと執着するというのがいまいちリアリティに欠ける話だ。レンも薄々それには気づいていたようだったが、彼女は主の命令が守れれば意図などはどうでもよいと判断したので、結果として彼の意図は永

遠の謎になってしまった……はずだった。

「でも彼は復活した。」

ロックエツジを襲い、ホイスビーを襲い、彼はなにをする気だったんだろう。さっぱりわからない。できれば直接会って聞きたかったけど、倒された以上それも無理だね」

マハは言ったが、俺は彼女とは違う意見だった。つまり——たぶん。直接会って聞いても無駄だったんじゃないか。

なんで、と聞かれたので俺は、たぶんあのヴィズルは偽物だと思う、と答えた。あの人形みたいな動きと、不自然すぎる戦闘行動、それからバカのひとつ覚えみたいな台詞の繰り返しと、倒した後の不可解な呪い。全部不自然だ。マハやレンから聞いた相手の行状とぜんぜん違う。アレは誰か知らないヤツがヴィズルとやらを真似て作った、なんかよくわからん鉄砲玉だと思ったほうがいいんじゃないのか。

マハは反論しようとしたが、それよりも、ボクもそう思う、という声が後ろから聞こえてくるほうが早かった。身体を杖で支えながら、重たそうな本を抱えたシヨロロがずるずるこつちに向かって歩いて来るところだった。

「クローン、っていうやつなんじゃないかな。たぶん」

とか言う。なんだよそのクローンって、と聞いたら、挿し木って意味だよと返された。……ならそう言えよ。要は枝の一部を切り取って植えて育てる例の——待て。それ人間でもできるのか。なんか凄くグロイ想像しか湧かないんだが。そう言ったらシヨロロがめっちゃくちやバカにしたような顔をした。あーあー悪かったね。どうせ俺はバカですよ。

で、シヨロロの言によれば、動物のクローンっていうのは錬金術業界でも伝説の範疇に入る技術だが、第五階層の遺跡を作った文明ならあるいはできたのかもしれない、ということだった。今回のヴィズルと思しきモノは、そうしてヴィズル風の外見をした生物を育成し、それにヴィズル風の物言いを覚え込ませて動かしていたんじゃないかな、と。誰がだよ、と聞いたら知らない、とあっさり返された。そりやそうだろうけど。

ともあれ、このあたりで体力が尽きたので今日はお開き。わかったことは多いが、まずは動けるようになるのが先だ。なんとかしないと。

・白蛇の月、3日

俺たちの身体を縛る呪詛の名は、エンタングルレイというらしい。診断したのはカチノへ。上級呪詛のひとつで、生半可な術者では扱えないものだとか。覚悟と免疫があれば数分で実害は消えるそうなのだが、今回みたいに不用意に呪と接触するとかかなり長く影響が残ってしまう、という話だった。

で、カチノへ曰く

「その呪詛はね……動こうとすると対抗するタイプだから……動き続けていれば、力を使い果たしてなくなっちゃうと思うんだ……たぶん」

とのことで、テリアカαの投薬と平行して適度な運動を勧められた。動くのもだるい俺としては勘弁して欲しかったんだが、シヨロロはやる気満々で樹海でトレーニングをしようと言いだした。おまえね、前衛が呪いで動けないってのにそんなんでできるか、と言ったが聞きやしねえ。しまいにヤイナー姉さんとカチドキだけ連れてでも行こうとしたので、仕方なく付き合うことにした。——この辺、アシタの同類だなこいつ。殴られるの嫌だから言わねーけど。

そして第二階層から始めて即ケルヌノス撃破。さすがにこの辺は弱いなー。後衛の弓だけで十分どうとでもなる感じ。

・白蛇の月、4日

調子に乗って挑んだ13階でワニ相手に死ぬ思いをして逃げた。弓が効かない相手は勘弁。

・白蛇の月、5日

どうせなら派手に行こう、ということでもリビトの里に行って協力を仰いだら、普通に訓練相手を快諾してくれた。そしてボコボコにさ

れた。ガツテム、こいつら絶対以前の恨みを拳に乗せてやがる。

とはいえ18階の水飲み場付近での訓練はそうとういい運動になった。おかげで心なしか、身体が軽くなってきた気がする。

・白蛇の月、6日

対モリビト戦、2日目。今日は模擬戦争訓練だ。

当然ながら、地域を特定されて集まられると人数に優位なモリビト達には絶対敵わない。なので隠れる場所のない平原は危険極まりないのだが、それを避けて小道のほうへ行ったらそこにすっげえ得意顔のモリコが大量の戦力を連れて待ち構えていた。

「行くと思った場所に伏兵を置き、叩く。戦術の基本だろう？」
で、ふたたびボコボコにされる。くそ、いまに見てろよ。」

・白蛇の月、7日

対モリビト戦、3日目。

イワヲさん（通称。本名、イワオロペネレプ）と戦闘訓練。モリコと違ってこっちは呼び名を気に入ってくれたようで、おーいイワヲさんと呼ぶと喜んでぴーぴー言いながら飛んできてくれる。モリコはすっげえ不満そうな顔してたけど。

そしてまたボコボコに。コルネオリがうまく動けないと雷もフェザースピアーも普通に対処できねえ。

・白蛇の月、8日

対モリビト戦、4日目。

オウガ+デモン相手に乱戦。だいぶ戦えるようになってきたが、やっぱりボコボコにされた。もう慣れてきたが、負けに慣れるつてのも嫌な話だ。ああ、早く全力で動きたい。

・白蛇の月、9日

今日から3日くらいはモリビト達は黄金祝祭日とかだそうで、訓練は断られた。

で、ちょうど俺たちも動きがよくなってきたことだし、と8階の飛竜を相手に腕試し。楽勝。すげえ、俺たちって動けさえすればこころで強くなってたんだ……と、思っていたら、戦闘中に折れたのか笛みたいな形の牙を拾った。

それで、俺たちが帰って執政院に報告をしていたちようどそのとき、イケニ5兄弟の……ちよ、長男？ 次男？ 悪い、誰だか区別つかないけど、そのうちのひとりが泣きながら飛び込んできた。なんでも、8階で得体の知れない赤い竜に襲われたらしい。

即ミツション発動。因果はわからないがたぶんまたおまえたちが原因だろうから殺ってこいと。……この体調で？ マジすか。

・白蛇の月、10日

血戦を制したのは、イナー姉さんの一撃だった。

巢穴の新しい主、偉大なる赤竜。幸い巢穴の構造を熟知していた俺たちは、悠々と相手の背後を取ることに成功した。防御陣形を展開し、ファイアガード完備、チェイス剣の準備オツケー、猛き戦いの舞曲が流れ始め——そこまでは、完璧だった。問題はそこからだ。

まず相手の、呪を含んだ咆吼がとんでもねえ。舞曲のおかげで精神は高揚していたが、それでもしないと咆吼だけで立ちすくんでなになんだかわからなくなってしまういそうなほどの威圧だった。いつ吐くか読みづらい炎の吐息のためにコルネオリはファイアガード固定、そうして防御がおろそかになったところに、冗談のような勢いで繰り出された尻尾によるなぎ払い攻撃が効いて、防御陣形を取っているにも関わらず一撃で全員がボロボロになった。

やがて陣形が崩れ、あと尻尾がもう一撃来たら間違いなくコルネオリが倒れるところまで追いつめられた。そうなるとファイアガードが持続できないので、俺たちの勝機はまずなくなる。だから速攻するしかないんだが咆吼による威圧のせいでまともに打撃が入れられやしねえ。コルネオリはファイアガードに忙しく、こりやジリ貧だな、と覚悟を決めかけたとき、イナー姉さんが奇妙な構えを取った。敵ではなく空を射抜く構え。鉄をも徹せ、サジタリウスの矢よ。そうつぶ

やいた彼女の手から放たれた矢は、しばらくして天空から槍となつて飛来し、いままさになぎ払いに移行しようとしていた尻尾を射抜き、杭打ちのように地面にたたきつけて固定した。痛みと、行動を封じられたことに火竜が悲鳴を上げて立ちすくみ——咆吼による制約が薄れたその瞬間、シヨロロの大氷嵐の術式に乗せた俺の剣が、相手にとどめを刺した。

後で聞いたのだが、どうやら怪我をした後でパベルに教えてもらった技らしい。なるほど、そういえば使ってたねパベル。とこしえの魔竜を相手にゲシゲシと削っていくあの火力はたしかに凄いモノがあった。特に今回はそれがなければ勝てなかっただろう。と考えると、レン&ツスクル戦での負傷は怪我の功名だったのかもしない。シヨロロは、対抗してこつちも電撃の術式とか覚えようかな、とか言っていた。……いや、対抗する必要あるのかソレ。

で、これも後で聞いたのだが赤竜はどうも例の牙笛から出る音が苦手だったらしく、そのせいで狙っていた住処を飛竜に取られてたとか。ところがその牙を俺たちが折ってしまったせいで、悠々住処を奪取することに成功した、ということらしい。あー、まあそりゃ俺たちのせいだわ。もう倒せたから誰も文句言わんけど、こういうこともあるから以後は気を付けよう。自然環境はどの桶屋が儲かるのか事前に判別しづらい。

第六階層（2）：散るもかなり

・白蛇の月、11日

またミツシヨン発動。なんでもグレイロツジが以前に倒した氷嵐の支配者が復活して悪さをしはじめたのでなんとかしてこい——と待て。なんでそれをグレイロツジじゃなくて俺たちに言う？ と聞いたら執政院の役人、え、だってまた君たちがなにかやったから暴れ出したんだらう？ と真顔で返しやがった。ハハハ、否定しても説得力がない自分が憎い。

とはいえ、15階のあの湖をどう渡るのかというのは大問題ではある。筏でも作るか、とも思ったが、渡っている途中で竜に來られたらたまったもんじゃねえしな。どうしたものか。

・白蛇の月、12日

祝祭明けにモリビトの集落に行ってみたら、片づけでえらくごった返してほとんど相手にされなかった。

それで、かろうじて相手にしてくれたモリコと雑談。15階で困ってるんだよなー、と言ったら、

「ではコロトラングルに乗っていけばよい。

速度は大したことはないが属性的に相性がいいからな。竜も好んで襲おうとはしないだろう」

と返された。そしてそのプランにシヨロロが大興奮。ミツシヨンとかはどうでもいい、ともかくコロトラングルに乗りたいたいという理由で決行確定。……最近、ギルド内での自分の発言力が急激に落ちていくような気がするんですが、これは気のせいでしょうか。ぶっちゃけそろそろシメたほうがよくないかアイツ。

で、とりあえず16階からの通路を確保して撤退。ちなみにシヨロロは最初ははしゃいでいたが、そのうちコロトラングルの揺れに酔っつてうつむいてなにも言わなくなった。お子さまめ。

・白蛇の月、13日

氷嵐の支配者を撃破。……あれ？ 弱くね？

相手なにもできない状態だったんだけど。ほとんどの攻撃はフリーズガードを抜けられないし、自分を強化しようとすればカチドキにペースを乱されてうまくいかない。グレイロツジと戦っていたときは氷の槍を生み出してマハに大ダメージを与えていたりしたのでアレがコルネオリに來たらまずいなーと思っていたんだがそういうこともなく無事撃破。

まあ、いい運動にはなった。エンタングルレイの影響もほとんどなくなつたことだし、そろそろ通常営業を再開してもいい頃かもしれない。

・白蛇の月、14日

グレイロツジが、活動停止した。

事件が起こつたのは30階の通路。前後から大量の魔物が——えーと魔竜10体と鳥15体と数えきれない量の白細胞、ですか。ハハそんなの聞きたくもねえ。ともかくそういうとんでもねえ量の敵に襲われたグレイロツジは、当然のように倒れ……なかった。

なにしろフロントガードとバックガードが同時にできるパーティだ。柔らかいのもワテナしかいないし、ムズピギーの呪歌が長期戦における体力をサポートする。火力はワテナとオコナーに任せろ。てな感じで、襲い来る敵を片端から焼き払い切り捨て、ついには全滅させてしまったらしい。もうぶっちゃけ人間の所行じゃねえよソレ。

とはいえさすがのあいつらも無傷とは行かなかつた。特にロツドテイルはあばら骨にヒビが入つたそうで、それでもそんなもん怪我のうちに入らん！ とか言っていたが歳を考えるとマハに説教されてしづしづ入院。他のメンバーも大なり小なり怪我をしているので、大事を取ってしばらく休むことにしたらしい。

そして俺たちにミッション発動。おそらくは30階にいますと思われる、魔竜たちを動員してグレイロツジを襲わせたり、ヴィズルのクローンを作つてロツクエツジを襲わせたりした黒幕。そいつをどうにかしてこい、というものだ。

通常営業どころの話じゃなかった。正真正銘、誰もたどり着いたことのない場所に住まう未知の強敵。おそらくは俺たちにしかできない、これまでにない大ミッション。その発動を受けて、シヨロ口は腕が鳴るね、と楽しそうに言った。イナー姉さんは怖いから行きたくないなあ、とぼやきながらさっさと弓の手入れを始めた。カチドキは未知の文物を目にできる機会に大興奮していた。コルネオリはいつものようになんにも考えてない。……緊張感ねえな。と思いつつ、まあ今回もなんとかなるだろ、と思っている俺もきつと同類なんだろう。染まつただけかもしれないけど。

・白蛇の月、15日

かつてロックエッジと共闘したときにあらかた地図を作り終えていたせいで、あつさり27階は素通り。28階の水飲み場で休憩しつつ29階へ。

グレイロツジの報告書によると、あまりにわけがわからんので地図なんて作れません、だそうな。なんだそりや、と思いつつ探索開始――がー！　なんだこのわけのわからねえ階は！

いろいろ抜け道みたいなのが入り組んでいてどこをどう行ったらいいのかわからん。法則みたいなのはかろうじて掴めるんだが、途中から本気で2択、3択、4択を迫られまくった。どうしようもないので巨大な亀がうろうろする回廊で亀を全部倒してから撤退。明日はどうかかなるかな……

・白蛇の月、17日

探索、続行中。

トライを繰り返すうちに時間が経ちすぎて体力が尽きたのでいったん28階にもどって水飲み場でキャンプし、もう一日かけてようやく30階への道筋を特定してから撤退。明日はどうとう、現行で知られている樹海の最下層を探索だ。気合い入れていくぞ！

・白蛇の月、19日

30階は、まるで人間の腸みたいにくねぐねと曲がりくねった一本道の続く場所だった。

竜と鳥はもう駆除されていたが、なんか赤い変な生き物とか剣が効かないサソリとかがウヨウヨしていてシヤレにならん。かろうじて体力が尽きる前に水飲み場を発見し、一息ついた。助かった……砂漠でオアシスを発見した探検隊の気分ってたぶんこんなんだろうなー。で、キャンプ。よく考えたら、こんな風にキャンプしながら探索するのは3度目だ。1度目は8階で試練のため。2度目はモリビトとの決戦に打ち勝つため。こいつらともずいぶん長い付き合いになったなあ。いつの間にか、一緒にいるのが当たり前前みたいになっちゃまった。

そうして活動再開し、26階への隠し通路を発見したのでいったん街へ帰還。明日はいよいよ決戦、準備は入念にしないと。

・白蛇の月、20日

樹海の奥の奥、扉を開けた俺たちを待っていたのは、火氷雷それぞれの竜のクローンだった。——あ、死ぬ。とか思った。あのときは。マジで。

で、戦闘。フリーズガードを連打しながら火竜を殴りまくるが、間隙を縫って繰り出された雷竜の打撃がコルネオリを直撃、あえなく気絶。まずい、負ける、と思ったその瞬間、銀の光が走って一撃で火竜がぶち倒された。——抜刀氷雪。刀を再び鞘に収めたレンは笑って、「どうした諸君。

こんな連中は私とツスクルより数段弱い。君たちに勝てない相手でもあるまい。よもや、緊張して実力が出せていないのではあるまいな？」

無茶言うな、と思ったがその言葉にシヨロロが大反応。やろうよアインテ、どうせ氷竜なんて攻撃する前に削っちゃえば大丈夫だよつ、と言って大爆炎連打。そしてマジで勝利。いやもう、気合い入れればなんとかなるんだなーとか若干危険なことを考えた。

で、いったん水飲み場まで撤退してレンと会話。どうやら、ここは

樹海を生み出した素となるモノがいる場所らしい。ヴィズルから昔聞いたところによると、ソイツは普段は森の維持のための活動しかないが、世界樹に危害が及ぶと樹海の中にいるべきでないと判断した相手をなんとしてでも排除しようとするモードに入るのだとか。おそらく、グレイロτζジとヴィズルの戦闘によってそのモードに入ったソイツが、今回の様々な事件の元凶なのだろう、ということだった。「ソイツ——フォレスト・セルはヴィズル達が設定した通りに動いているだけだ。そしてソイツは、ヴィズルを世界樹を守るモノの象徴みたいに捉えていたんだろう。だからコピーを作り出して戦わせた。まあ、結果としてヴィズルの遺志を果たそうとしているという意味で、幽霊というのは不当ではない評価かもしれんな」

レンはそう言う。なんだよ、ならまたやるのか、と言ったら彼女は悲しそうに、
「もう、やめたよ。」

ヴィズルがなにを考えていたのかは知らないけれど、もうそれは過去のものでしかない。こだわつてもしょうがないさ。

——アイノテ、君が言ったとおりだ。死んだモノのために誰かが襲われ傷つくなんて馬鹿げている。引導、渡してやってくれ」と、言った。

レンが言うには、ヴィズルはレンに次のようなことを言っていたらしい。なにかの間違いでフォレスト・セルが動き出したら自分が止める。ただし万が一自分が留守のときはレンに対処をお願いする。本体に強力な打撃を与えれば活動を停止して再起動するはずだ。対処のために、フォレスト・セルの戦闘プログラムの概要を渡しておくから参考にしてくれ——という話だ。要するに強く叩けば直るということらしく、そのための対処策もおおまかには教えてくれたらしい。

共闘しよう、と言ったのだが、レンは首を横に振った。
「フォレスト・セルの起動中、周囲にフォレスト・セルの細胞たちが大量に集まってくる。それをだれかが止めないといけない。」

私はモリビト達に任せるつもりだったが、彼らは長い戦争の影響でだいぶ戦力を失っているし、——正直、これ以上彼らを巻き込みたく

ない。だから、私が止めるのでそのうちに君たちがフォレスト・セルをなんとかしてやってくれ」

そして、決戦。

先ほど3童のクローンがいた場所の、さらに奥。そこに、いままで見ただんな生物とも違う、禍々しい姿があつた。

勝てるかな、とシヨロロが言ったので、勝てるだろ、と答えた。いままで俺たちはこのメンバーで数多の強敵を打ち破ってきた。今回もきつとそうなるさ。

相手が唸る。俺はレンから教えられた対フォレスト・セル用戦闘手法を反芻する。最初の攻撃はエクस्पロウド。火竜の炎もかくやというレベルの超火炎だ。対抗するためには、コルネオリがガードするしかない。カチドキが歌い始め、イナー姉さんが全員動きやすいようにと指示を飛ばす。すげえ、こんな技術も知っていたのかこのひと。そうして最初の炎をかわした俺たちに対して、フォレスト・セルは強烈な威圧をかけてきた。——王の威厳。カチドキの歌が止まり、行動が乱れる。ヤバい、いきなり乱された!?! このタイミングで炎でも来たら死ぬ、と思ったのだが、フォレスト・セルは変な粉を全体に撒いただけだった。助かった、と思ったのもつかの間、いきなり強烈な睡眠に襲われてひぎをつく。まさか毒ガス! くそ、予想外だ。イナー姉さんとカチドキも肌が石のように堅くなって行動が制限され、コルネオリはうわあ目が見えないと叫び出した。もうダメかと思ったところ、シヨロロが薬を撒く。テリアカβ。全員かろうじて復活。しかしフォレスト・セルから次の攻撃が! と思つたらコルネオリが当てずっぽうに振り回した盾に相手の触腕がぶち当たり、威力が減殺された攻撃ではイナー姉さんを倒すことはできなかつた。ラッキー! だがうかうかはしてられない。そろそろ次の大攻撃の連打、すなわちサンダーストーム↓エクस्पロウド↓フリージング連鎖が来る。コルネオリはガードを準備、俺とシヨロロは迎撃用意を固め、その間にイナー姉さんが——すげえ、一度に3本も矢を撃ち放つた! 強烈な打撃にフォレスト・セルが悲鳴を上げる。さらに前と同様に向けて矢を放つて、そしてカチドキの呪歌が全員を鼓舞する。態勢が整つ

た、と思った瞬間に王の威厳サンダーstorm王の威厳エクスプロウ
ド王の威厳フリージングむきー！ 態勢が一向に整わないままジリ
ジリと時間が過ぎ、そしてふたたび相手の毒ガス攻撃。うわ目が見え
なくなつた！ 慌ててカバンからテリアカβを取り出してあたりに
撒く。幸い、コルネオリはちよつとした呪を受けただけで無事だった
ので、次の炎にはファイアガードが間に合った。

とはいえ、偶然保っていることは当然こちらも承知している。こう
なつたら速攻しかねえと腹をくくつた俺たちは態勢を整えつつ猛攻。
だが火力が足りねえ！ くそ、せめて俺がスタンバツシュでも使えれ
ばいいんだが、シヨロロも俺も多勢を相手に属性戦を行うことを主眼
に入れたスタイルなので攻撃力が若干足りない——と言つた瞬間、
シヨロロが

「あ。電撃の術式、忘れてた」

あ、じゃねえよバカ。さっさと使えー！

はい勝ちました。最後、相手がなにか危険なコトをやろうとしたの
が見えたがギリギリこちらの勢いのほうが上だったらしい。まった
く、最後まで締まらねえ話だ。——それも俺たちらしいっちゃらしい
けど。

エピソード：次の冒険へ

・白蛇の月、21日

帰ってきたら英雄扱いだった。

まあ、悪い気はしない。相手はとんでもないバケモノだったが、運と知識に大いに頼っていたとはいえ、こうして勝つことができたのだ。いちおう褒められていい結果は出したって言っていいたいだろう。

異変は去り、樹海は平穏を取り戻した。第六階層もこれからはずいぶん行きやすい場所になるだろうし、ひよっとしたらさらに奥へ探索が進むのかもしれない。樹海を生み出す素となるモノは30階にいるが、さらに下がないとは限らないし、なかったとしても未知の素材がたくさん眠る樹海は十分に魅力的な場所だ。

そしていつものように金鹿の酒場で宴会。バカ騒ぎが続き、カチドキがうまくもない歌を歌い出す。すぐにムズピギーとチクタクが寄ってきて伴奏を始め、周囲はやんややんやの大喝采。とんでもねえ騒ぎになった。

で、宴も一段落してバカも体力を使い果たし、ほどよく静かになってきたところで、俺はその話を切り出した。——そろそろ引退したい、と。

最初に反応したのは、なんとコルネオリだった。やめないでくれよ、アイノテがいなかったら僕たちどうすればいいんだよーと言って泣き出す。……しまった、こいつ酒入っていると人格変わるんだっけ。おまけにカチドキもそれに唱和し、なんでやめるなんて言うんだと詰りめ寄せられた。

なんでもなにも、俺がもう限界だと思ったからさ、と言ったのだがぜんぜん聞いてくれやしない。堂々巡りが続き、いい加減うんざりしてきたところでイナー姉さんが、まあ本人が決めたならしょうがないかな、と言って、それで一応議論が収まった。

なんとなく宴って雰囲気でもなくなってしまうって、気まずいまま宿屋へ。部屋でこの日記を書いていたら、その途中でドアをノックする音がした。

ドアの向こうには、さつき一言も発しなかったシヨロ口がいた。真つ青な顔をしていたのでどうしたと問うと、やめちややだよアイノテ、置いていかないで、と言って、そして泣き出した。

……参ったね。覚悟はしていたがここまで反応が返ってくると思っていなかった。とりあえず泣き疲れて眠ってしまつたシヨロ口はイナー姉さんに預けたが、去り際にそのイナー姉さんからも非難がましい目で見られちまつた。四面楚歌か。

・白蛇の月、22日

なんとなくみんなと顔を合わせづらくなって酒場へ。

あいにくまだ準備中の時間だったが、店内を見たらアシタがひとりでちびちびやっていた。……不良め。昼間つからなにやっつてんだよおまえと聞いたら、キミに言われたくないなあと返された。そりやそうだ。

アシタもまた、俺がやめると言い出したのは知っていたようだった。さすがに違うギルドであるこいつは俺の決定に反対したりはしなかったが、

「でも変だよ、キミ。」

樹海も平和になつて、ようやく安定して儲けられるようになったのに、なんでいまやめるのさ?」
と聞いてきた。

俺も、なんとなくこいつには本当の理由をしゃべってもいい気がしていた。なので、まだ誰にもしゃべっていない、俺が引退する本当の理由を、話すことにした。

そもそも、いまのホイスビーはオーバーワークなのだ。

いろいろあつて長期間フル稼働せざるを得なくなつちまつたし、結果として大物を退治したりした。けど、それは本来の俺たちの実力からはかけ離れた業績だ。なんとかいままでやっつてこれたのは運もあるし、勢いみたいなものもあつたんだろうが、このまま突っ走つていたらいつか破綻するのは目に見えている。

けど、ホイスビーは有名になりすぎた。このままだと俺たちがブ

レーキを望んでも、周囲がそれを許してくれない。もう崖っぷちなのに、後ろからどんどん押してくるから戻れやしない。どうにかしようと思えば、一度ホイスビーと呼ばれるもの自体をぶっ壊す——俺には、それしか思い浮かばなかった。そういうことだ。

「で、やめることにしたワケ」

アシタはそう言っつて、納得したようにうなずいた。そして、
「バカたれ。」

そんなんだからみんなに怒られるのよ、キミは」

と言いつつ放った。……そんなんつて、俺にか悪いことしたか？ と問うと、

「だって誰とも相談してないでしょ、それ。」

照れくさいんだかなんだか知らないけどさー。そういうのつてみんなで決めるのが筋でしょ？ 勝手に決めたら揉めるに決まつてるじゃない。あつたま悪いなーホント」

……それをおまえが言うか。自分勝手大王。

「あたしはいいのよ。天才だから。」

で、どうするの。やめるのはいいとして、このまま身勝手に物別れバイバイで済ますわけ？ キミたち、そういう気まずい別れ方で済ましていい仲だった？」

あーもう、わかつたよ。

まさかこいつに説教される日が来るとは思わなかった。参ったね。この街には俺にとって頭が上がらない人間が多すぎる。

ともかく、そうと決めたら善は急げ。去り際、アシタに一言だけ、ありがとよ、と言った。相手はきししと笑つて、惚れるなよ、と返してきた。

宿に帰つて、みんなを集めて俺はさっきのことを説明した。俺だけじゃなくて、ホイスビーという形自体がもう、一度壊さないといけないうものになっていること。そのために、俺が出て行くのがたぶん最善だろうということ。

カチドキとコルネオリはまだ不満そうだったが、イナー姉さんが俺の味方になってくれた。そして、またシヨロ口はなにも言わなかつ

た。

……ともかく。これでお膳立ては整った。出立の日は、明後日と決めている。どこに行くかはまだ決めていないが、冒険者稼業のおかげで金はそれなりにあるし、どこに行つたつてそれなりにやっていけるだろう。元よりこの身は根無し草、樹海は不釣り合いに過ぎる。つてね。

・白蛇の月、23日

グレイロツジの道場に行つて挨拶。

もう退院していたロツドテイルは相変わらず。俺が街を出ると言つても、ふん、としか言わなかった。マハは寂しくなるねー、でも恋しくなつたらいつでも帰つてくるんだよ、と言つた。……最近ようやくわかつてきたが、こいつ俺のこと子供扱いしてないか？

後はいつものように。俺がいなくなって困る人間がいるわけでもなし、まあこんなもんだらう。世話になつた何人かにも挨拶回りは済ませておいた。後は心置きなく、旅立つだけだ。

そしてシヨロ口は顔を見せもしない。参つた、本格的に機嫌を損ねちまつたかね。せめて見送りくらいは来てくれないと寂しいんだが……まあ、仕方ねえか。

・白蛇の月、24日

出立の日。

あんまり湿っぽいのも嫌なので、早めに出立することにした。見送りはカチドキとコルネオリとイナー姉さん。やっぱシヨロ口は来なかった。

カチドキはまだ納得していないようで、わたしたちならグレイロツジだつて目じやないのにさー、とかぶーたれてる。無茶言うなよ。こいつも過剰極まりない自信だけは誰にも負けねえな。

コルネオリは、案の定泣いていた。寂しくなるよお、と言つて。……今日は酒入つてねえはずなんだけどな。こっちは逆に、実力に見合わないほど気弱なんだよな。不思議なことだ。

イナー姉さんはいつもの通り。落ち着いたら便りをよこすようにね、とだけ言つて笑つていた。このひとはホント強いなあ。どうして戦闘中だけあんなへっぴり腰になるのかよくわからん。

あんまり話し込んでいると出立する気がどんどん減っていくので、俺は早いうちに切り上げて出ることにした。また、月日が経てばこの街にもどつてくることもあるだろう。そのときは、みんな笑つて語り合えばいい。

そのときまで、しばしの別れを。

そして街の門を出る。とりあえずシリカ商店で近くの地図は買つておいたのだが、あんまり行き場所は決めてない。なにしろエトリアは樹海が見つかるまでただの田舎都市だった場所だ。近隣の地域も似たようなもので、そうとう遠くまで行かないとソードマンの就職口は探せないなーとか思つていたら、ばたばたとえらく騒がしい足音。あ、こりやヤツだな。と予感して振り向くと、案の定そこにいたのは——つて、なんだそのでけえ荷物。聞くと、シヨロロはぜえぜえ言いながら、

「だ、だつて、遠くまで旅するんでしょ？ だから」

だからじゃねえよ。まさかテメエついてくるつもりじゃねえだろうな、と言つたらヤロウ、いかにも当然という顔で

「当たり前。だつてアイノテ、ボクがいないとただの使えないソードマンじゃない。チエイサーにはアルケミストがいないとね」

……いや。いやいや待て。そもそもテメエ親がこの街にいるんだろ、と言つたら、

「そんなの、当然許可もらつてきたに決まってるじゃない。ボクがなんのために昨日一日かけて家にもどつていたと思つてるのさ。父さん説得するの、けっこう大変だったんだからね」

と言つて、はいこれが証明書、と一枚の紙をよこした。……手紙かよ。うわアイノテ様とかすげえ達筆で書いてある。中身読むの怖いんだけどこれ。

「じゃ、そういうことでまずは南下して海に出よう。船に乗れば陸路よりだいぶ早いし。」

どうせアイノテ、行くところ決めてないんでしょ？ ボクね、見てみたい場所が山ほどあるんだ！ すごく楽しみ！」

言って俺の腕を引っ張るシヨロロは、もう俺の返事とかどうでもいいといった風情ではしゃいでいる。——あー、ダメだ。止める言葉が思い浮かばねえ。つーかなんだかんだ言って、俺はこいつにからつきし勝てねえんだな。

まあ、こんなのもいいだろう。

道はまだずっと遠くまで続き、俺たちの冒険も、まだまだ終わりそうにない。

それでも。コイツと一緒になら、たぶんどこでも楽しいはずだ。

——次の冒険が、始まる。

アイノテ世界樹日記：あとがき

というわけでこの作品はこれで完結です。

見てわかる通り、出てきたキャラクターは全部、僕が世界樹の迷宮をプレイしたときにキャラメイクしたキャラか、NPCです。

世界樹をやったことがあれば「あーこんなクエストあったなー」というところも随所にあっただと思います。だいたい時系列順に消化したつもりですが、作劇の都合上、第四階層の突破より先にアルルーナやマンティコアを倒すなど、一部変形してあります。

微妙に投稿時に悩んだのが「オリ主」タグをつけるかどうかでした。いや、世界樹の迷宮の「PCキャラ」って、オリ主なんでしょうかね。それとも公式キャラなんでしょうか。悩むところです。

一応タグはつけませんでした。まあ、世界樹の迷宮が原作である以上、原作知ってる人ならそのへんはわかるだろうと思つてのことです。ご承知置きください。

あとそういえば、いちいち訂正はしませんが、最初の注意書きで述べたのに大嘘がひとつありました。ケルヌノスで詰んだのはパラディン単騎縛りですね。詰んだ理由は十字の種子を手に入れる方法がないから。で、レンジャーで行ったら20階までは単騎で行けました。さすがにイワヲさんは無理でしたが。

さて、では一応、出てきたメインギルド3つのキャラクターの終了時の状況を軽くざざつと書いて、終わりにしましょう。ほとんど出てこなかったグレイロツジのバードとアルケミストは省略で。

・ギルド「ホイスビー」メンバー

1) アイノテ

クラス：ソードマン アラインメント：Law-Neutral

性別：男 年齢：18

パーティ内の役回り：突撃するシヨロロを止める役。参謀。戦隊もので言うならブルー。

どう考えてもリーダーではない性格なのだが、他にリーダーできる

奴がいらないせいでリーダーをやることに。

背負い込む性格なのでストレスとかすごかったと思うが、新天地ではもっと楽しくやれる……か？

2) ショロロ

クラス：アルケミスト アラインメント：Chaos—Good

性別：女 年齢：13

パーティ内の役回り：切り込み隊長（注：アルケミストです）

なんか気づいたらヒロインになってた子。

たぶん全キャラ中最も熱血。戦隊ものならレッド。理屈による鬱展開を力でねじ伏せる！それがスタイル。なんでこいつアルケミストなんだろうね？

ちなみに13にしてはかなり背が高いです（アルケミストの、金髪の方）。そのせいでアイノテには最初、男かと勘違いされてたり。でも最終的にはちゃんとヒロインしていたのでまあ、よし。

3) コルネオリ

クラス：パラディン アラインメント：Law—Good 性別：

男 年齢：16

パーティ内の役回り：準切り込み隊長（注：パラディンです）

気合い満々、そしてなにも考えず突撃、が信条のパラディン。とりあえず盾に隠れて突撃していればなんとかなると思っっているっぽい。たぶんこのギルドでいちばん単純な意味で強いキャラ。

途中からまるでギャルゲーの古典的脇役男キャラのような空気っぷりを見せたが、彼には彼の物語があるのです。……たぶん！ なんとなくアシタさんへの憧れを捨てれば無難に幸せになれそうな気がする。魔性の女、アシタである。

4) イナー

クラス：レンジャー アラインメント：Neutral—Neutral

性別：女 年齢：21

パーティ内の役回り：万能裏方。

いや、世界樹初代ね、レンジャーとメディックは本当にバランスぶっ壊れてるんで……おかしいでしょこの能力。採集でパーティの

手助けをしつつ罨床などを無効化しつつアザステで戦線を安定させてサジ矢で敵をぶちのめす。何役できるんですかねこれ。

一応文章中では地味ですが、このひといなかつたらギルド壊滅します。気弱で自己評価低めだけど存在感はコルネオリより上。なんなんですかねこのひと。

5) カチドキ(カチドキR)

クラス：ジャーナリスト アラインメント：Chaos—Neutral 性別：女 年齢：19

パーティ内の役回り：情報収集と回復。

ジャーナリスト気取りの困ったバード、のほろほろなのですが……一応使えたバードの能力が大活躍。たぶん一番パーティに依存していないキャラなので、今後も世界樹を巡る冒険を引つかき回しまくるでしょう。

・ギルド「ロックエッジ」メンバー

1) アシタ

クラス：メディック……? アラインメント：Chaos—Good

d 性別：女 年齢：15

パーティ内の役回り：メイン火力の一翼。

最初は日記内に直接登場しないはずなのに、異様な存在感でサブヒロインみたいな座をぶんどっていったサイボーグ馬鹿。

勝手に暴れ出したとしか言いようがないんですけどねこれは。第三階層の日記での彼女の行動はひとつの例外もなく書いている途中に勝手にこいつが暴れ出してあなりました。おかげで、コルネオリの思惑とは裏腹にロックエッジはどんどんホイスビーのライバルギルドと化していくという。たぶんコルネオリ空気化の最大の主犯。

2) ハラヘルス

クラス：ダークハンター アラインメント：Law—Neutral

1 性別：女 年齢：14

パーティ内の役回り：サポート火力。

鞭系極振りダークハンター。ナリアンテスと違って縛りスキルを

極めています。なお、ダークハンターにされたのはアシタに無理やりであり、本来は清楚な美少女です。清楚な美少女にジエンド極めさせるアシタマジ悪魔。

3) チ・フルル

クラス：ソードマン アラインメント：Neutral—Good

性別：女 年齢：19

パーティ内の役回り：メイン火力の一翼。

たぶんロックエッジが火力馬鹿である最大の由来。アシタとタメ張れるどころか押さえ込めるレベルの斧極振りソードマン。なのですが、アイノテとはまったく別方面に自己評価が低く、「いえいえー。わたしはただ単にアルバイトで樹海に行ってる一般人ですのー」とか言うエトリア最強のソードマンです。馬鹿みたいに強いよ！

4) カチノへ

クラス：カースメイカー アラインメント：Chaos—Evil

性別：男 年齢：14

パーティ内の役回り：ハラヘルスのストーカー兼お荷物。

想定外の斜め上の方向で大活躍したシヨタ呪い師。シヨタのくせになかなか経験豊富(?)。ハラヘルスをめっちゃくちゃ気に入ってつきまどっているが、一線を越えた外道な真似をするとアシタストライクが頭に飛んでくるのでいまいち踏み込めない様子。

5) パベール

クラス：レンジャー アラインメント：Neutral—Neutral

性別：男 年齢：15

パーティ内の役回り：ブレイキ役。あと胃を壊してぶっ倒れる役。

地味な性格で目立たないけど、そこはレンジャー。イナーを越えるレベルと攻撃特化の能力で相手を制圧します。そしてアシタに制圧されます。

アシタさえ幼なじみでなければ、こんなに苦労せずに済んだでしょうにねえ……しみじみ。

・ギルド「グレイロツジ」メンバー

1) ロッドテイル

クラス：パラデイン アラインメント：Law—Good 性別：

男 年齢：42

パーティ内の役回り：リーダー兼メイン防御担当。

エトリア全体の冒険者の主みたいな存在。どつしりした構え、ずつしりした性格、頑固一徹の性格、走り出したら止まらない試練に次ぐ試練。ははーん実はこいつツンデレだな？

なお、パーティ内では、ごく普通のパラデインとして振る舞っている模様。なぜかというところ、相棒のマハが強すぎるので立場があまり高くないのです。外弁慶？

2) マハ

クラス：パラデイン アラインメント：Neutral—Good

性別：女 年齢：15

パーティ内の役回り：防御寄りの万能キャラ。

グレイロッジ道場の師範代。知らなかったアイノテはタメ口利いてますが、知ってるひとたちはあの場でガクブルしました。ただまあ、当人かるとい外人さんみたいなノリなんで、あんまりそういうの気にしてませんが。いぎゆけボウケンシャー！ とか言っても違和感ない。

もともと陰でサポートすることに慣れた役回りなので、他のギルドへの助言、サポートはお手のもの。でもいちばん重要なのは、無茶する冒険者を一喝して止める係。つつい無茶しがちなグレイロッジがギルドとして大成したのも、実は彼女の適度なブレーキあればこそ。それをわかっているからロッドテイルも彼女には頭が上がらないですねえ。

3) ワテナ

クラス：ブシドー アラインメント：Neutral—Neutral

al 性別：女 年齢：18

パーティ内の役回り：生きる暴力。

構え？ なにそれ？ と言いつつ踏み袈裟で1ターン一殺する狂気のブシドー。

こいつがいるからこそ、半端な状況でグレイロツジが壊れないんですな。アルケミストの火力の後押しがあるとはいえ、雑魚とかボスとか関係なくぶち殺す彼女は本当にヤバい。

あ、ちなみにフルネームは「ワテナ・チャウネン」です。カナガワ地方出身。名前の響きについて訊いた人間がその後生きていたところを見たものはいないという物騒な噂があります。

さて、このへんでこの作品はお開きにしましょう。

次回作「イルミネ世界樹日記」はこの作品より後の時代、ハイ||ラガードを舞台とした作品です。

乞うご期待！